

第6回 邪馬台国近畿説について

西谷 正



I はじめに

II 邪馬台国の登場—3世紀前半の東アジア

- (1) 中国大陸—魏・呉・蜀の三国時代（『三国志』の世界）
- (2) 朝鮮半島—楽浪・帯方郡、夫余、高句麗、東沃沮、挹婁、濊、韓（馬韓・辰韓・弁韓）
- (3) 日本列島—倭人（使訳通ずる所三十国—邪馬台国ほか）

III 『魏志』倭人伝の内容と性格

- (1) 距離・方位などの地理情報と、風俗・習慣などの生活情報
- (2) 魏と倭、ことに邪馬台国との外交関係—朝貢・冊封体制
- (3) 『三国志』の編纂の意図と『魏志』倭人伝の性格

IV 魏の詔書の性格と「銅鏡百枚」

- (1) 魏の詔書の信憑性
- (2) 「銅鏡百枚」は三角縁神獸鏡
- (3) 小林行雄博士の同范鏡論

V 倭国の乱の検証

- (1) 環濠集落と高地性集落の分布
- (2) 鉄製武器の発達と銅・骨・木製鏃による補完
- (3) 木製武具（甲・盾）の発達

VI 邪馬台国の舞台

- (1) 小型銅鐸と銅鐸形土製品の分布
- (2) 小型倣製鏡・貨泉の分布
- (3) 前方後円（方）形墳丘墓の分布

VII 邪馬台国の規模と墳墓

- (1) 纏向遺跡
- (2) 大和古墳群

VIII 「纏向型」古墳と庄内式土器の分布

IX おわりに

其南有狗奴國男

子爲王其官有狗古智卑
狗不屬女王

景初

二年六月倭女王遣大夫
難升米等詣郡求詣天子
朝獻太守劉夏遣吏將送
詣京都其年十二月詔書
報倭女王曰制詔親魏倭
王卑彌呼帶方太守劉夏
遣使送汝大夫難升米次
使都市牛利奉汝所獻男
生口四人女生口六人班
布二匹二丈以到汝所在
踰遠乃遣使貢獻是汝之
忠孝我甚哀汝今以汝爲
親魏倭王假金印紫綬裝
封付帶方太守假授汝其
綬撫種人勉爲孝順汝來
使難升米牛利涉遠道路
勤勞今以難升米爲率善
中郎將牛利爲率善校尉
假銀印青綬引見勞賜遣
還今以絳地交龍錦五匹

⑩ 其の南に狗奴國あり。男子を王となす。其の官に狗古智卑狗あり。女王に屬さず。

⑪ 景初二年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし郡に詣り、天子に詣りて朝獻せんことを求む。太守劉夏、吏將を遣わし、送りて京都に詣る。その年の十二月、詔書して、倭の女王に報じて曰く、「親魏倭王卑彌呼に制詔す。帶方太守劉夏、使を遣わし、汝が大夫難升米、次使都市牛利を送り、汝が獻する所の、男生口四人、女生口六人、班布二匹二丈を奉じて以て到る。汝が在る所、踰遠なり。乃ち使を遣わして貢獻す。是、汝の忠孝、我甚だ汝を哀れむ。今、汝を以て、親魏倭王となし、金印紫綬を假し、裝封して帶方の太守に付して假授せしむ。汝が來使難升米、牛利、遠きを涉り、道路勤勞す。今、難升米を以て、率善中郎將となし、牛利を率善校尉となし、銀印青綬を假し、引見して勞賜遣還す。今、絳地交龍錦五匹、絳地縹粟

絳地縹粟罽十張蒨絳五

十四紺青五十四匹答汝所
獻貢直又特賜汝紺地句
文錦三匹細班華罽五張
白絹五十四金八兩五尺
刀二口銅鏡百枚眞珠鉛
丹各五十斤皆裝封付難
升米牛利還到錄受悉可
以示汝國中使知國家
哀汝故鄭重賜汝好物也

罽十張、蒨絳五十四、紺青五十四を以て、汝が獻する所の貢直に答う。又、特に汝に紺地句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十四、金八兩、五尺刀二口、銅鏡百枚、眞珠、鉛丹各五十斤を賜わり、皆裝封して難升米、牛利に付す。還り到らば錄受し、悉く以て汝が國中の人に示し、國家の汝を哀れむが故に、鄭重に汝に好物を賜うことを知らしむべし」と。

其八年太守王頌到官

倭女王卑彌呼與狗奴國
男王卑彌弓呼素不和遣
倭載斯烏越等詣郡說相
攻擊狀遣塞曹掾史張政
等因齋詔書黃幢拜假難
升米爲檄告諭之

⑫ 其の八年、大守王頌、官に到る。倭の女王卑彌呼、狗奴國の男王、卑彌弓呼と、素より和せず。倭の載斯烏越等を遣わし、郡に詣りて、相攻撃するの状を説く。塞曹掾史張政等を遣わして、因つて詔書、黃幢を齎し、難升米に拝假せしめ、檄をなして、之を告諭す。

180頃 倭国大乱
 卑弥呼の共立によって大乱終息。
 後漢建安中(196-220) 公孫孫, 楽浪郡の南に帯方郡を分立。

220 後漢の滅亡。魏の建國。

237 公孫淵, 自立して燕王を称す。

238 魏, 遼東の公孫淵を滅ぼし, 楽浪・帯方郡を取める。

239(景初3年) 卑弥呼, 魏に朝貢し, 銅鏡百枚を賜わる。

240(正始元年) 帯方郡太守, 使いを卑弥呼に遣わし, 詔とともに銅鏡などを賜う。

243 倭王, また魏に朝貢。

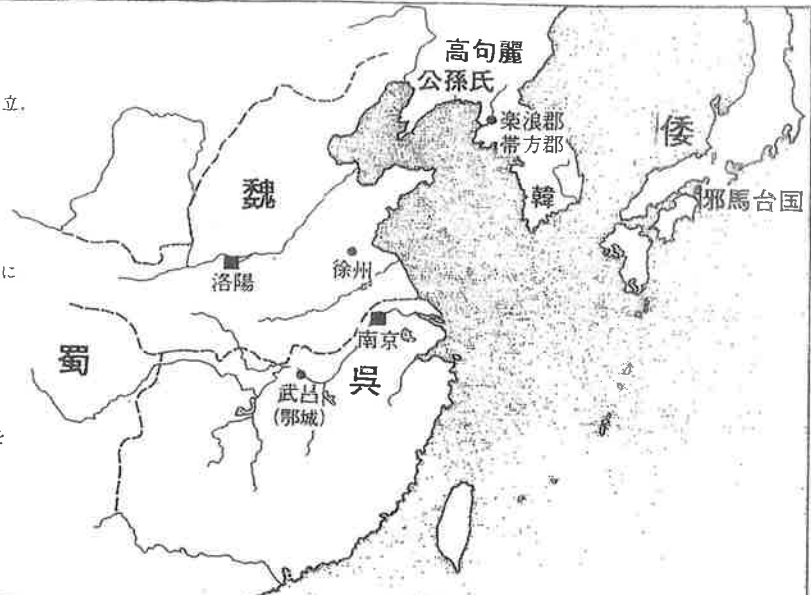
245 魏帝, 詔して倭の難升米に黄幢を賜う。

247 卑弥呼, 狗奴国との交戦を帯方郡に知らせる。

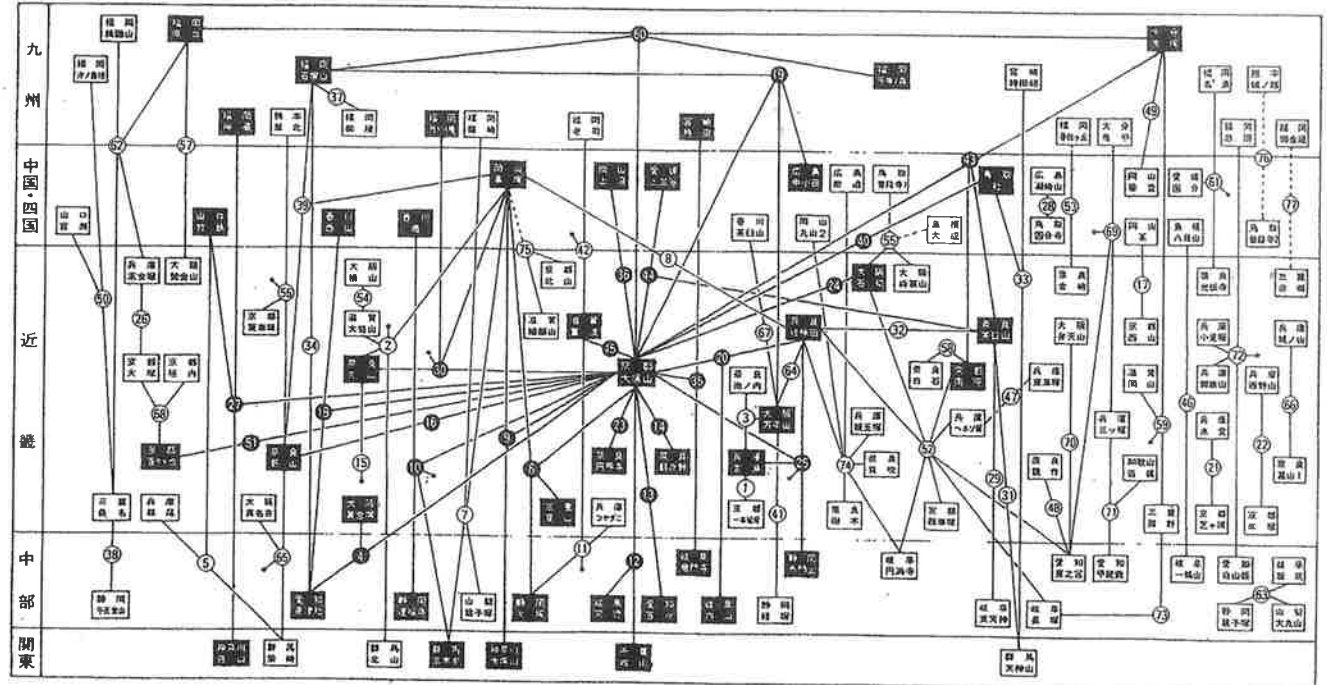
248頃 卑弥呼死す。男王が立つが, おさまらず, 宗女の台与を女王として国ついに定まる。台与, 魏に朝貢。

265 魏が減び, 西晋の建國。

266 倭, 西晋に朝貢。



3世紀の東アジア



中国製三角縁神獸鏡の同範鏡分有関係 (小林行雄1987年7月12日作成)

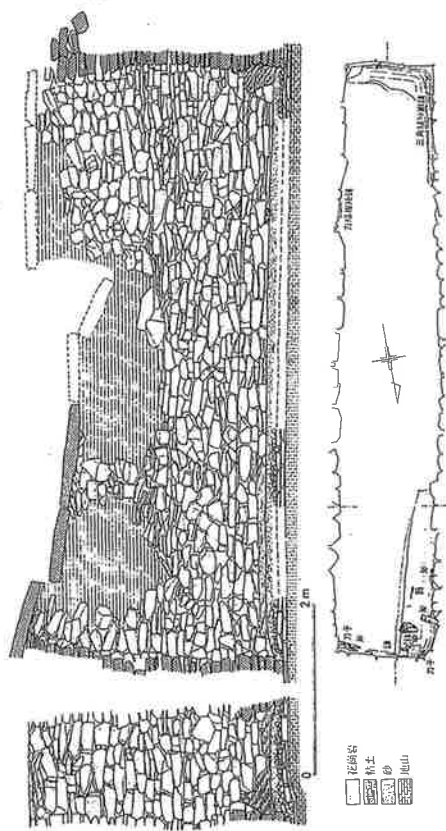
京都大学文学部考古学研究室, 1989
 『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』
 京都大学文学部博物館図録,
 京都大学文学部

三角縁神獸鏡とは

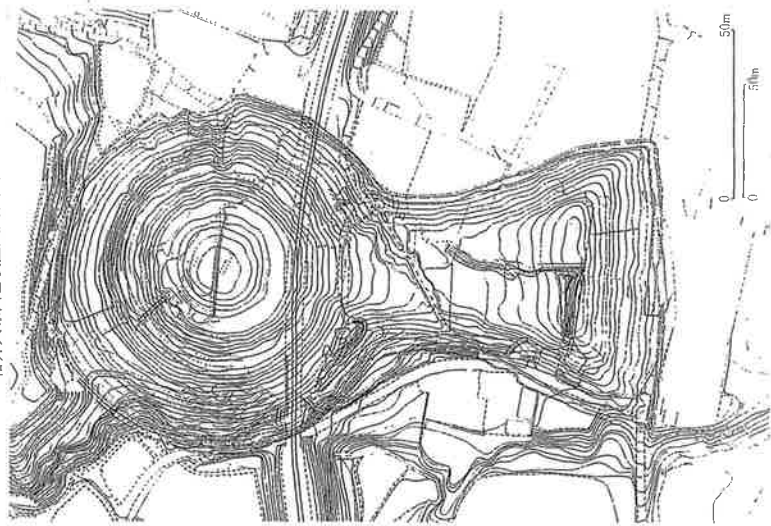
中国の神話に登場するような西王母や東王父(東王公)などの神仙や靈獣を浮彫りふうに表現した鏡のうち、周縁の断面が三角形状に突出した大型の鏡が三角縁神獸鏡である。

中央の半球形の突起が紐孔のある鈕。その周囲が神像、獸像のある内区で、図像が高い円錐形の乳で区画されている。この例では神像と獸像がそれぞれ4体ずつあるので、四神四獸鏡と呼ぶ。内区の外側には鋸齒文をもつ突出した界線で文様帯を区分し、この例では獸文の間に乳と「天王日月」の銘文をいれた方格とを記している。その外の鋸齒文と波状文からなる一段高くなった部分が外区、そして三角縁となっている。

三角縁神獸鏡のほとんどは直径が20 cmをこえるこのような大型品であり、平均が22.3 cmある。後漢時代の神獸鏡や画像鏡の流れをうけて3世紀に作られたもので、景初三年(239)、正始元年(240)など魏の年号をもつものが知られている。日本の古墳からこれまでに出土した330面ほどのうち、椿井大塚山古墳からはその約1割にあたる32面以上もの大量の三角縁神獸鏡が出土している。

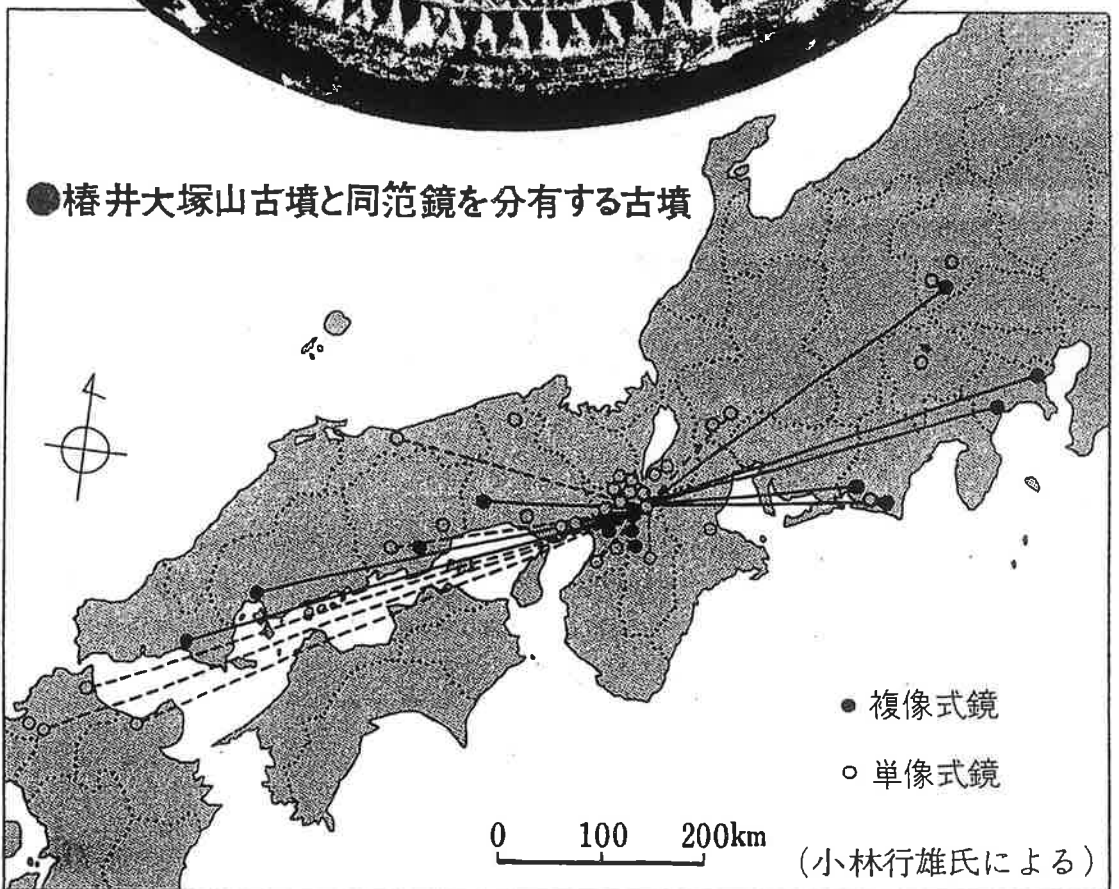


権井大塚山古墳竪穴式石室構造図



権井大塚山古墳と菅塚古墳(赤)の比較

京都府立総合資料館研究員一九九〇年 権井大塚山古墳と三角塚神鏡



人物群像・日本の歴史 第1巻『古代の大王』1978 学研による

同範鏡 一鏡の兄弟たち

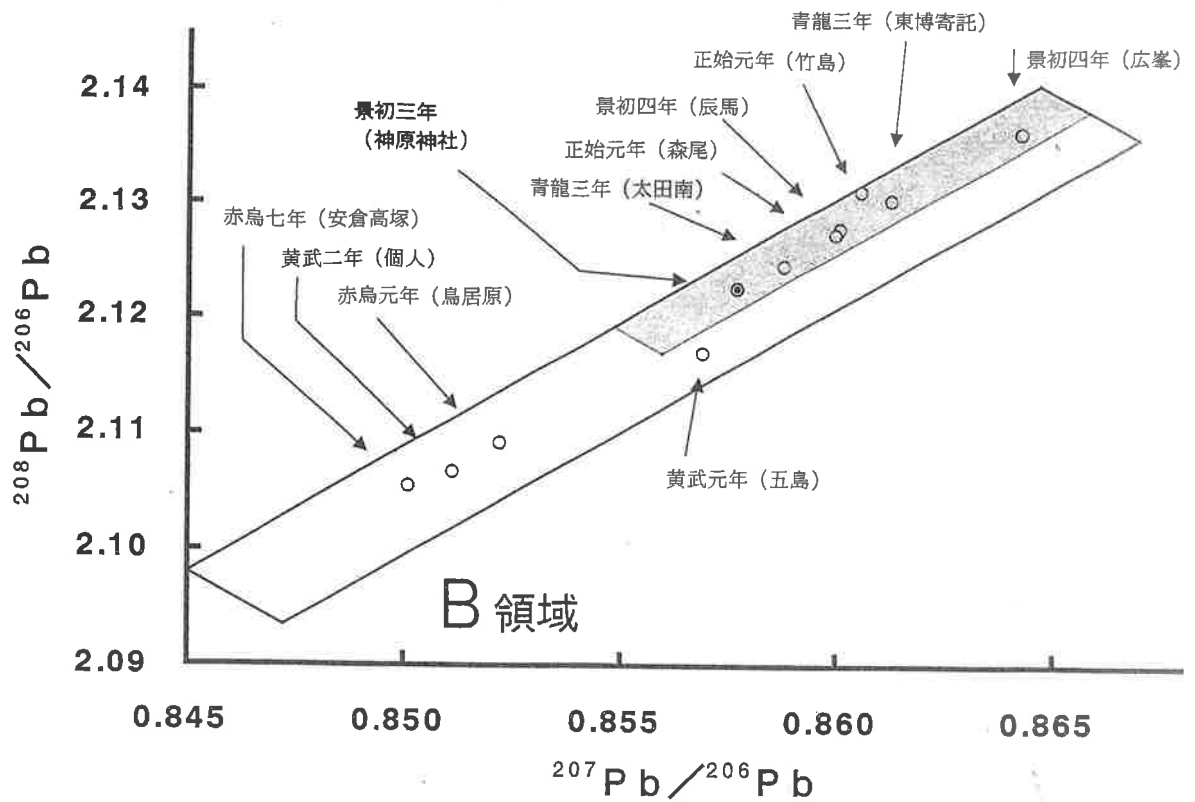
ひとつの鋳型や原型から鋳造された鏡は互いに同じ文様となる。

同じ型(範)から作られた鏡、同範鏡^{どうはんきよう}である。これらは、同じ型を母にもった、いわば鏡の兄弟である。三角縁神獸鏡の大きな特徴は、この同範鏡が非常に多く、全国の古墳に同範の鏡どうしが分かれて散らばっていることである。各地の古墳に離ればなれになった同範の兄弟も、もとは同じ所にあつたに違いない。

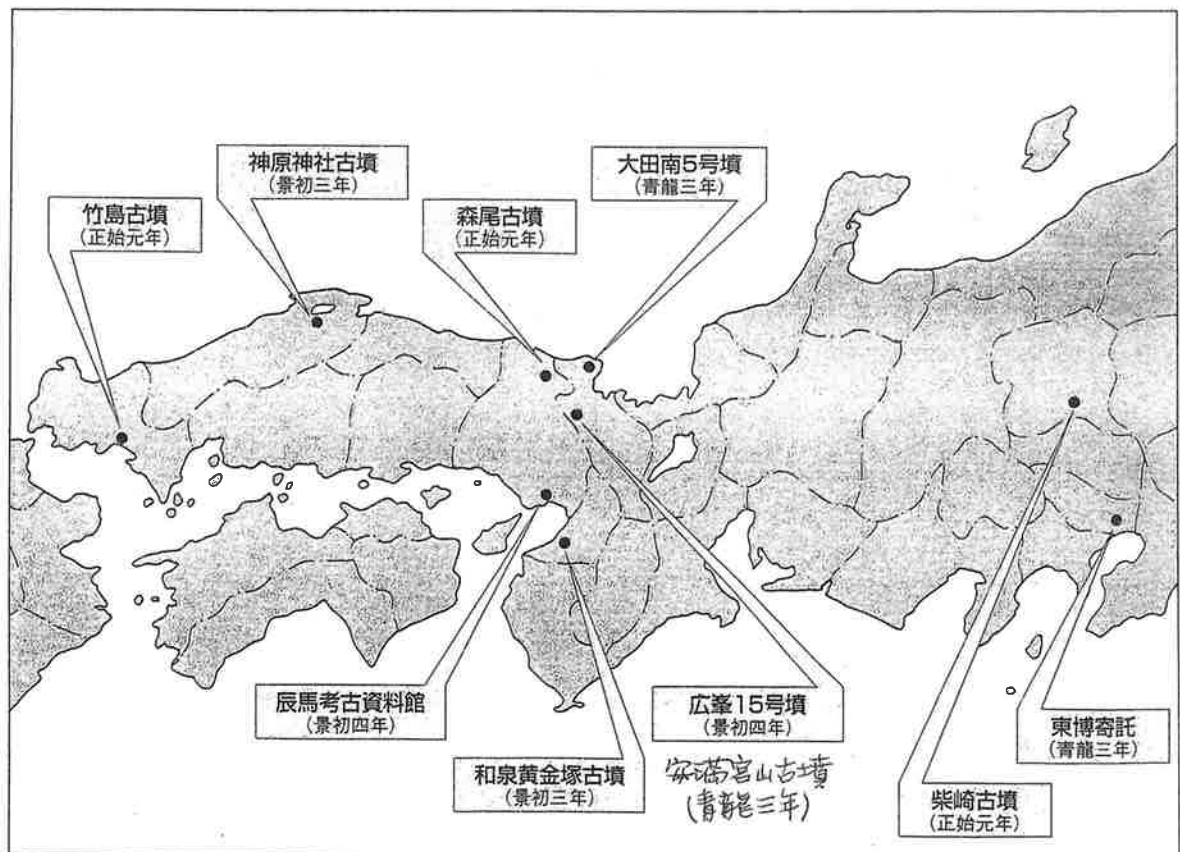
椿井大塚山古墳は、全国の古墳のなかでもっとも多く三角縁神獸鏡が出土し、多くの古墳と同範鏡を分有している。このことから、椿井大塚山古墳の主が三角縁神獸鏡の大親元の一人であり、彼によって三角縁神獸鏡が全国に配布されたのではないかという学説が生まれた。離ればなれになった同範鏡の兄弟がどのような理由で、どのような道をたどって各地の古墳に納められたか、そこに古墳時代の成立を考える鍵があると多くの研究者は考えている。



京都大学文学部考古学研究室, 1989 『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』

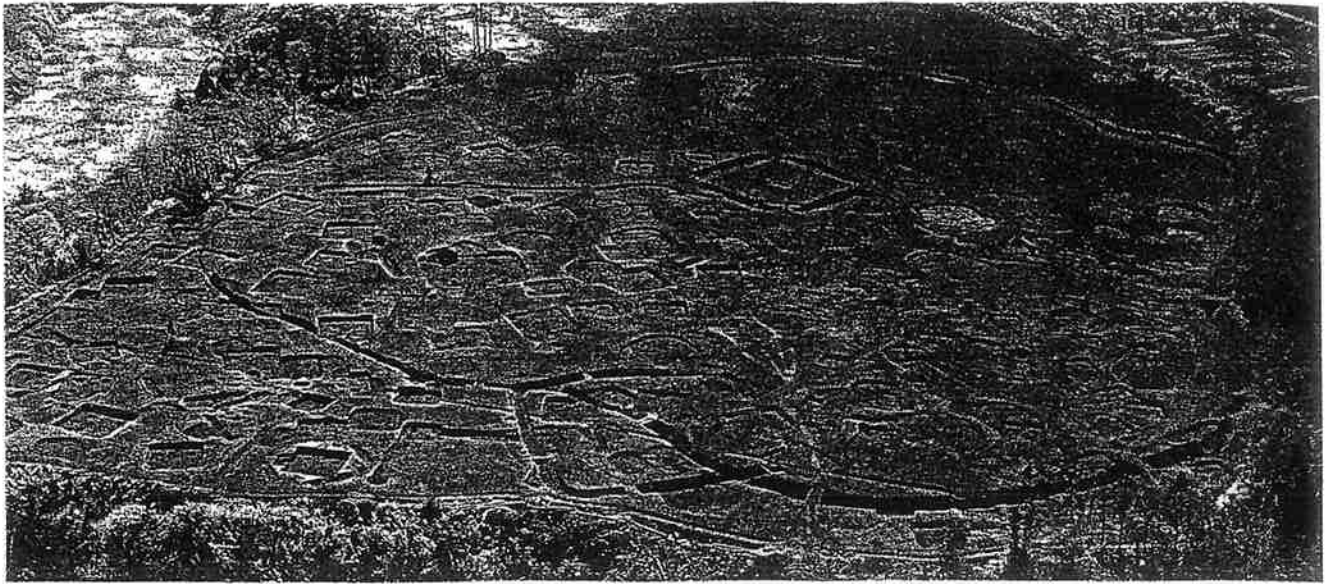


魏と呉の年号を持つ紀年鏡の鉛同位体比

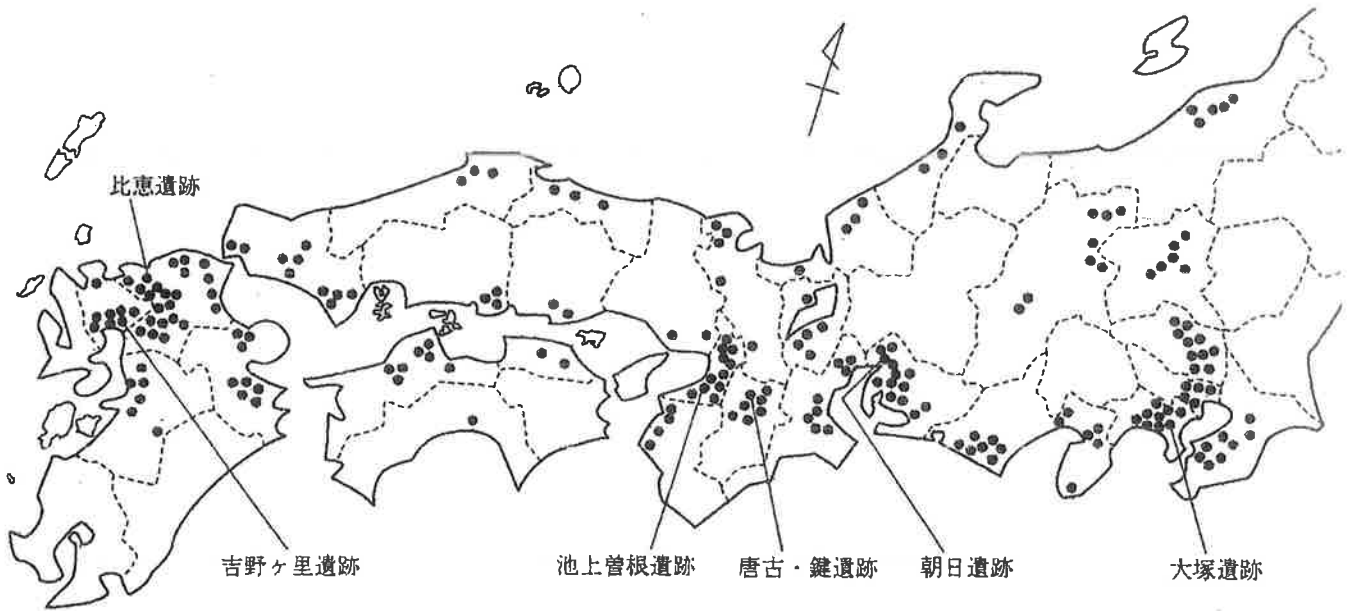


魏の年号鏡の出土地

島根県加茂町教育委員会, 2002 『神原神社古墳』 加茂町教育委員会



大崎台遺跡全景／千葉県



日本列島における弥生時代環濠集落の分布の概観 (約500カ所ある)

高島忠平, 2005 「邪馬台国への道 - なぞの天竺国はどこか -」 『邪馬台国シンポジウム in 飯塚』

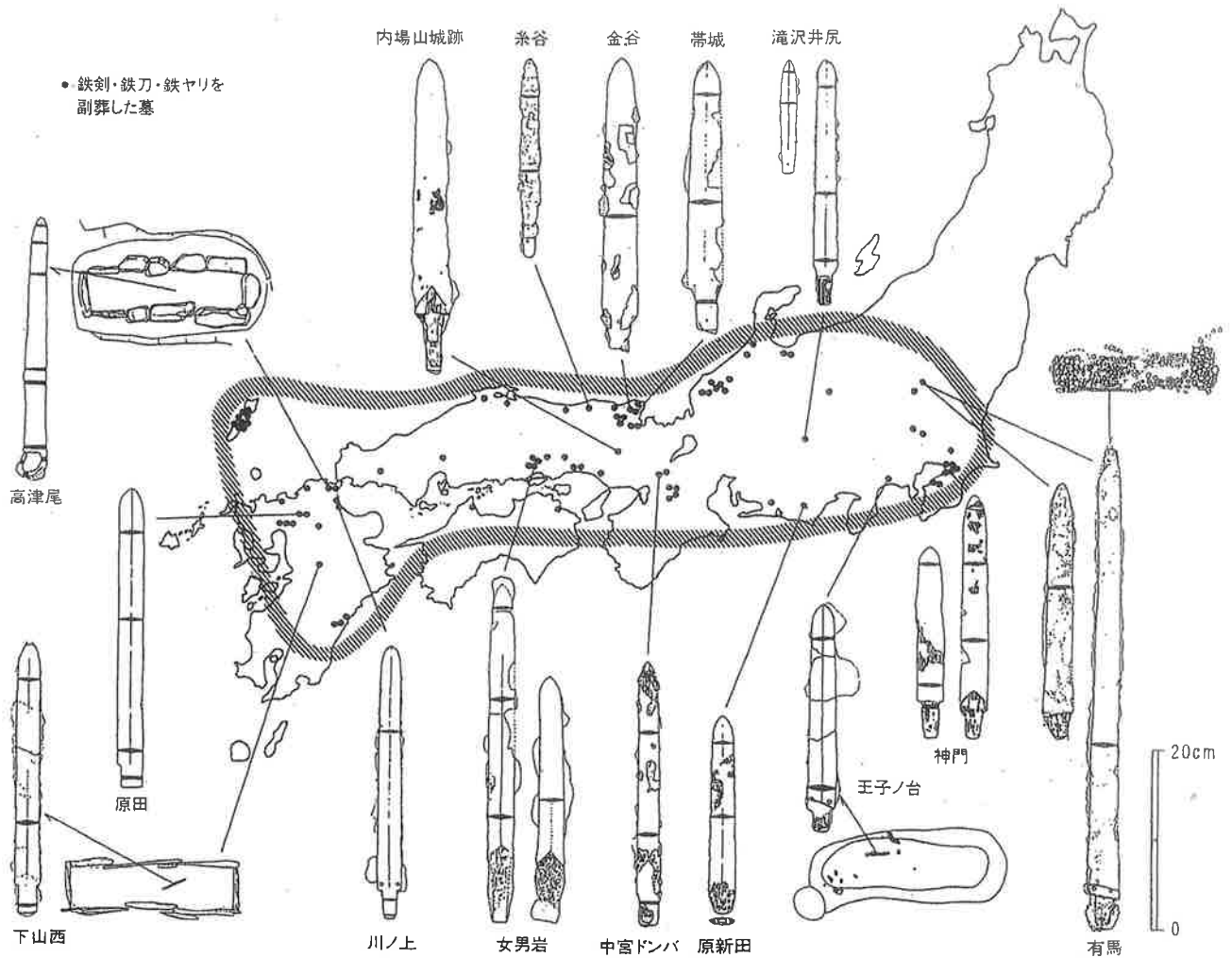
・第V様式 (弥生時代後期)、防禦的集落址分布

- ① 畿内勢力の東海地方への進入
- ② 吉備 (畿内) 等勢力の北九州地方への進入
- ③ 吉備勢力の大和への進入



前澤輝政, 1996 「<倭国大乱>考」 『古代学研究』 第135号

「大乱」の推定地域



弥生時代終りころの武器と戦いのひろがり
(鉄剣)

国立歴史民俗博物館, 1996~97 『倭国乱る』 朝日新聞社

銅鏃の形態分類

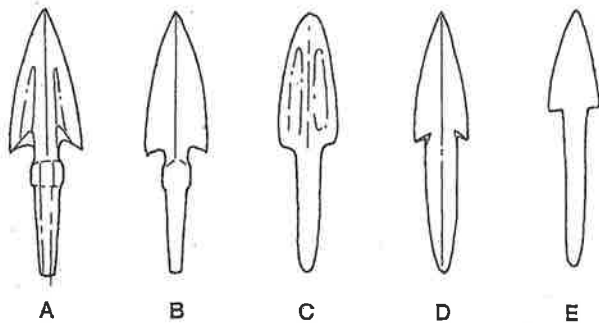
A類・・・原の辻を代表する中期後葉の銅鏃

B類・・・A類からやや退化傾向をみせ、筒被の造りが雑でやや扁平となる。

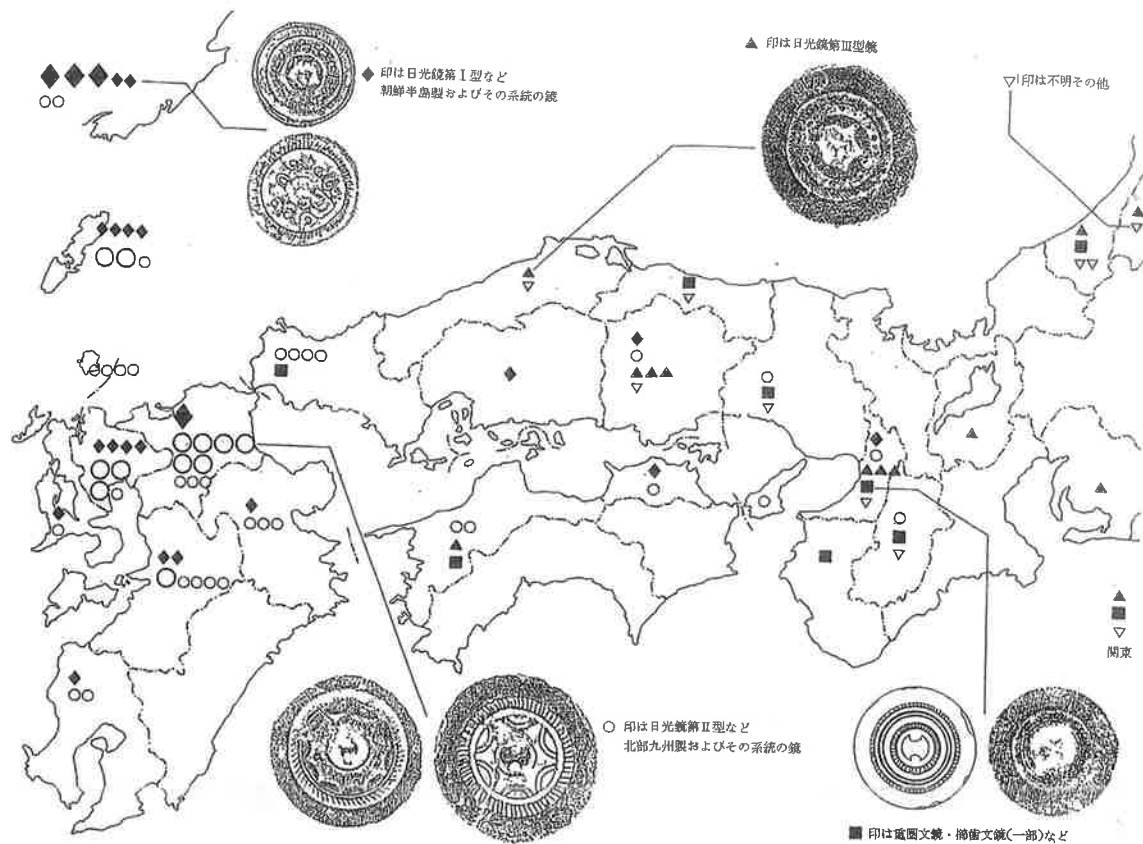
C類・・・逆刺の造りが弱く、筒被が消滅する。樋が特徴である。

D類・・・断面三角形を呈し、逆刺は短いが鋭い。逆刺は、茎の側面から削り出す。

E類・・・茎が刃部よりも長くなる。造りも概ね雑となる。

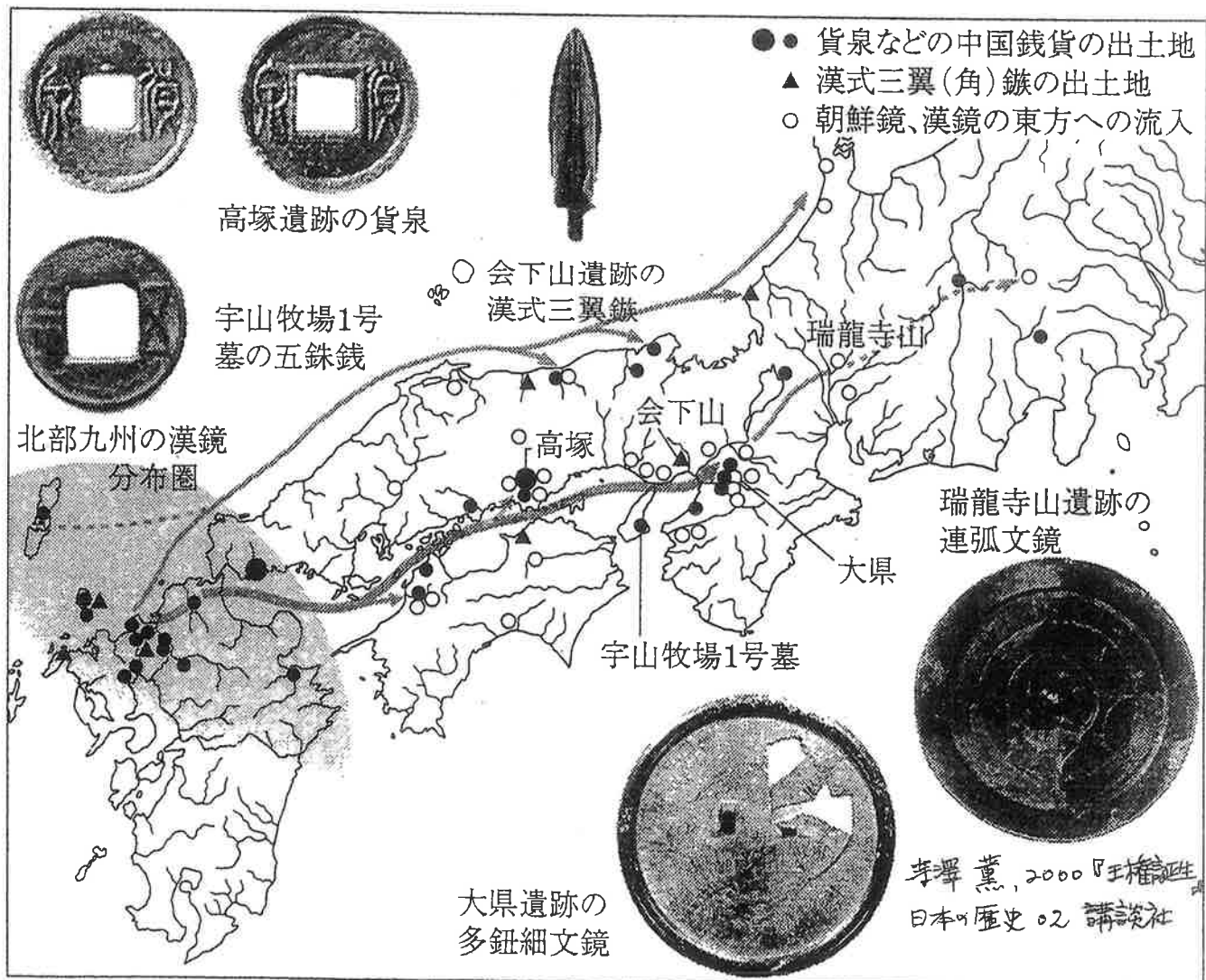


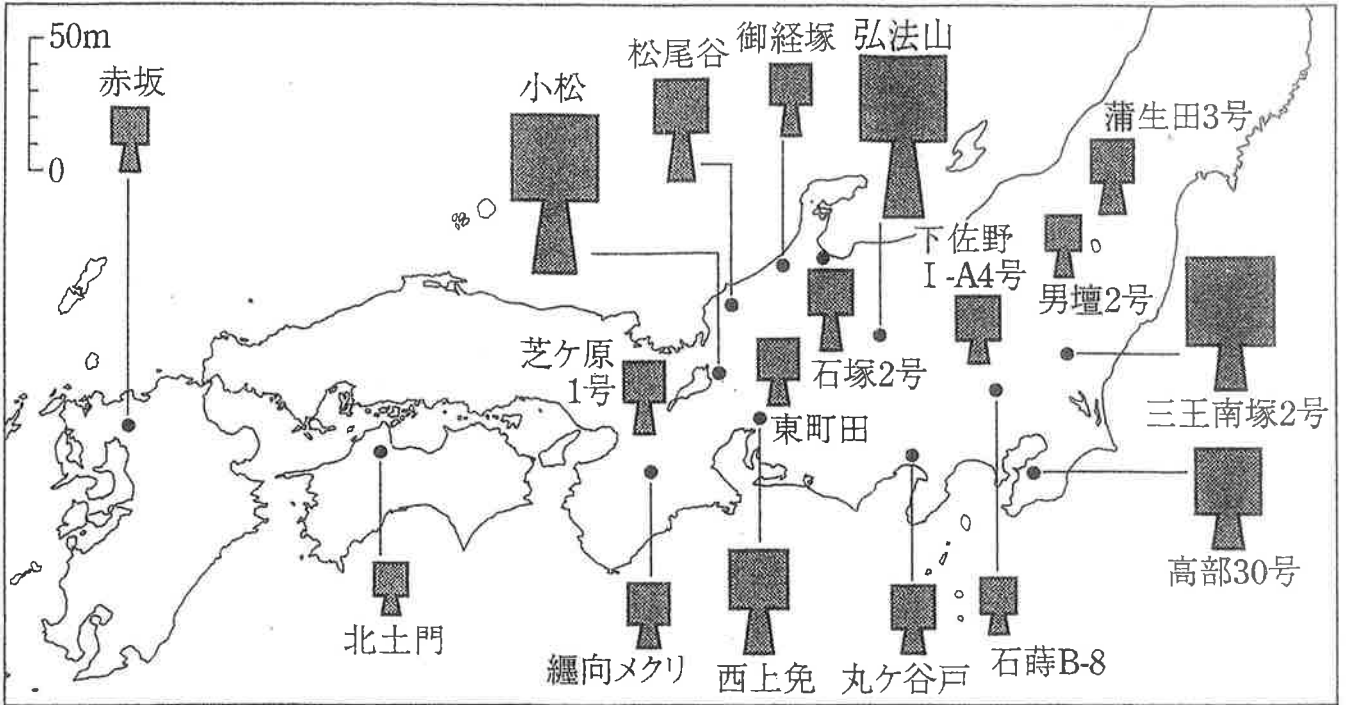
銅鏃形態分類



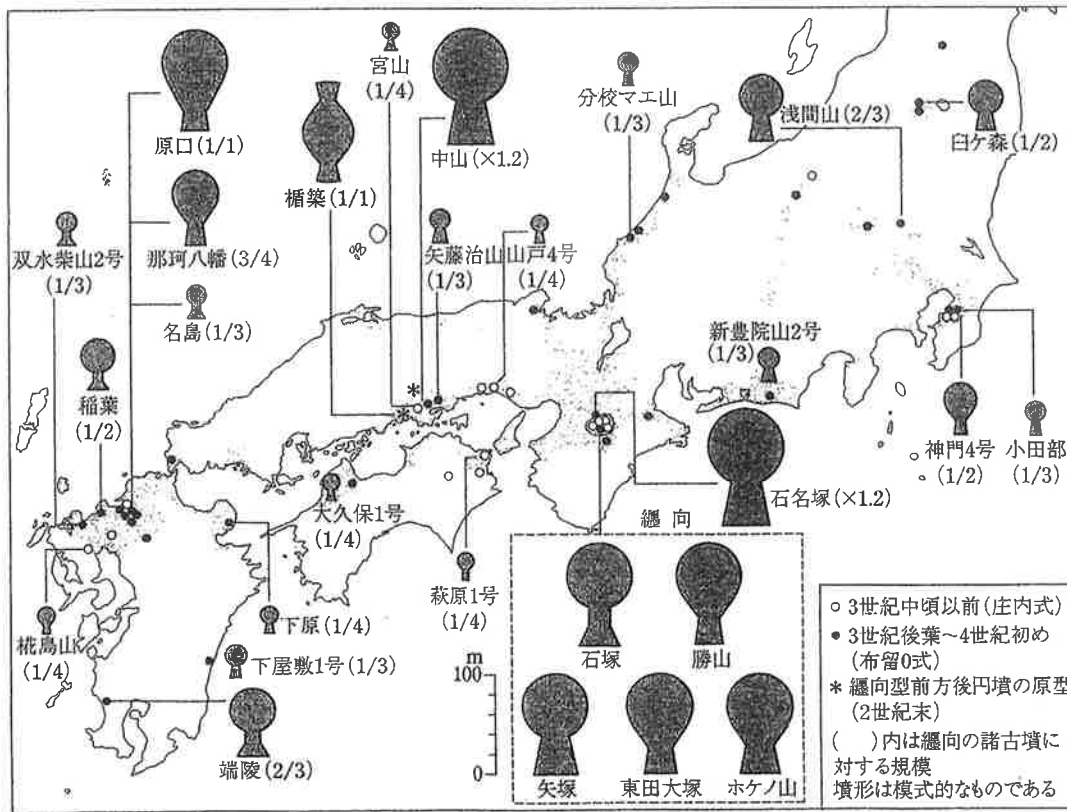
弥生時代小形仿製鏡の県別出土傾向(記号の大きさは5面, 小は1面をあらわす)

高倉洋彰, 1990『日本金属器出現期の研究』学生社

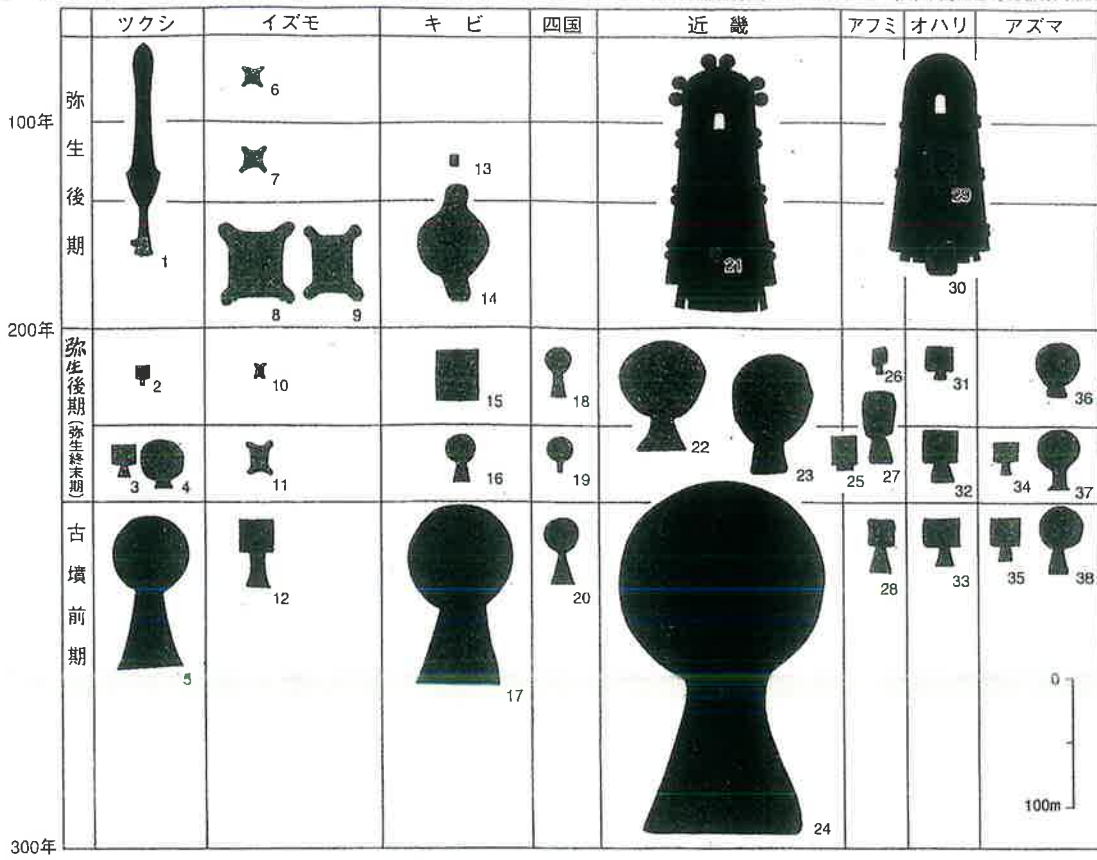









初期の前方後方墳の分布 各地の3世紀後半代の前方後方墳の最大のものを比べてみると、東日本に大形のものが多くはわかる。しかしヤマトの纏向を頂点として各地に分布した纏向型前方後円墳のような政治的な関係は、ここではみることができない



【纏向型前方後円墳】前方後円墳の起源である「纏向型」前方後円墳は二世紀末の楯築墳丘墓をもとに、三世紀前半のヤマト王権の王都纏向で誕生した。その縮小規格のものが王権に加わった各地のオウ(王)たちにもとり入れられていった。庄内式のものが中・東部瀬戸内や北部九州に集中し、畿内系土器がめだつて流入する地域(薄地のゾーン)とも重なる点に注意

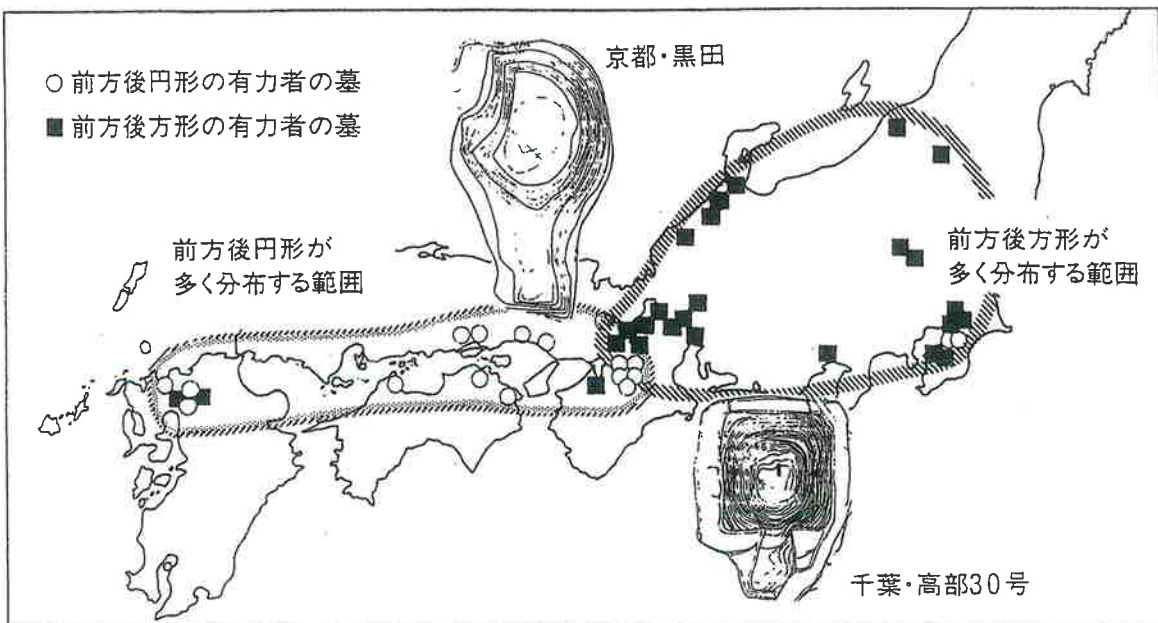


 : 広形銅矛
  : 墳丘墓
  : 近畿式銅鐙
  : 古墳
  : 三遠式銅鐙

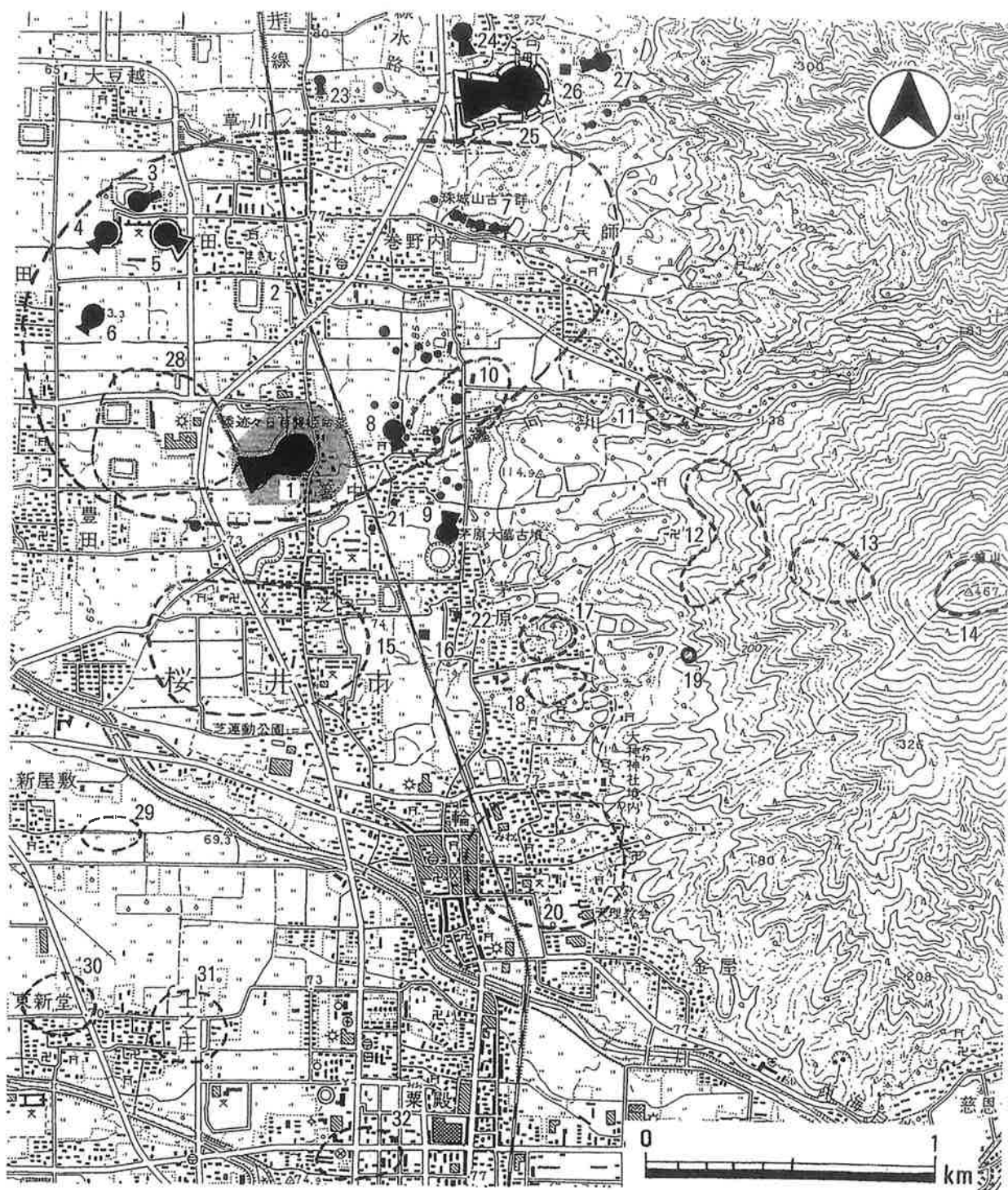
- | | | | | | | | |
|---------|----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|---------|
| 1. 平原 | 6. 友田 | 11. 大木権現山 | 16. 宮山 | 21. 黒石10 | 26. 法勝寺 | 31. 廻間 | 36. 神門5 |
| 2. 宮ノ前 | 7. 阿弥大寺3 | 12. 松本3 | 17. 浦間茶臼山 | 22. 石塚 | 27. 小松 | 32. 西上免 | 37. 神門4 |
| 3. 吉野ヶ里 | 8. 西桂見1 | 13. 伊予部山 | 18. 鶴尾4 | 23. ホケノ山 | 28. 富波 | 33. 象鼻山 | 38. 神門3 |
| 4. 津古生掛 | 9. 西谷3 | 14. 楠築 | 19. 萩原1 | 24. 箸墓 | 29. 瑞龍寺山 | 34. 高部32 | |
| 5. 石塚山 | 10. 間内越1 | 15. 鯉喰 | 20. 爺ヶ松 | 25. 芝ヶ原 | 30. 加佐美山 | 35. 高部30 | |

墳丘墓から古墳への動向

滋賀県立安土城博物館, 2002 『共に一女子を立て一皇孫の政權が成立』



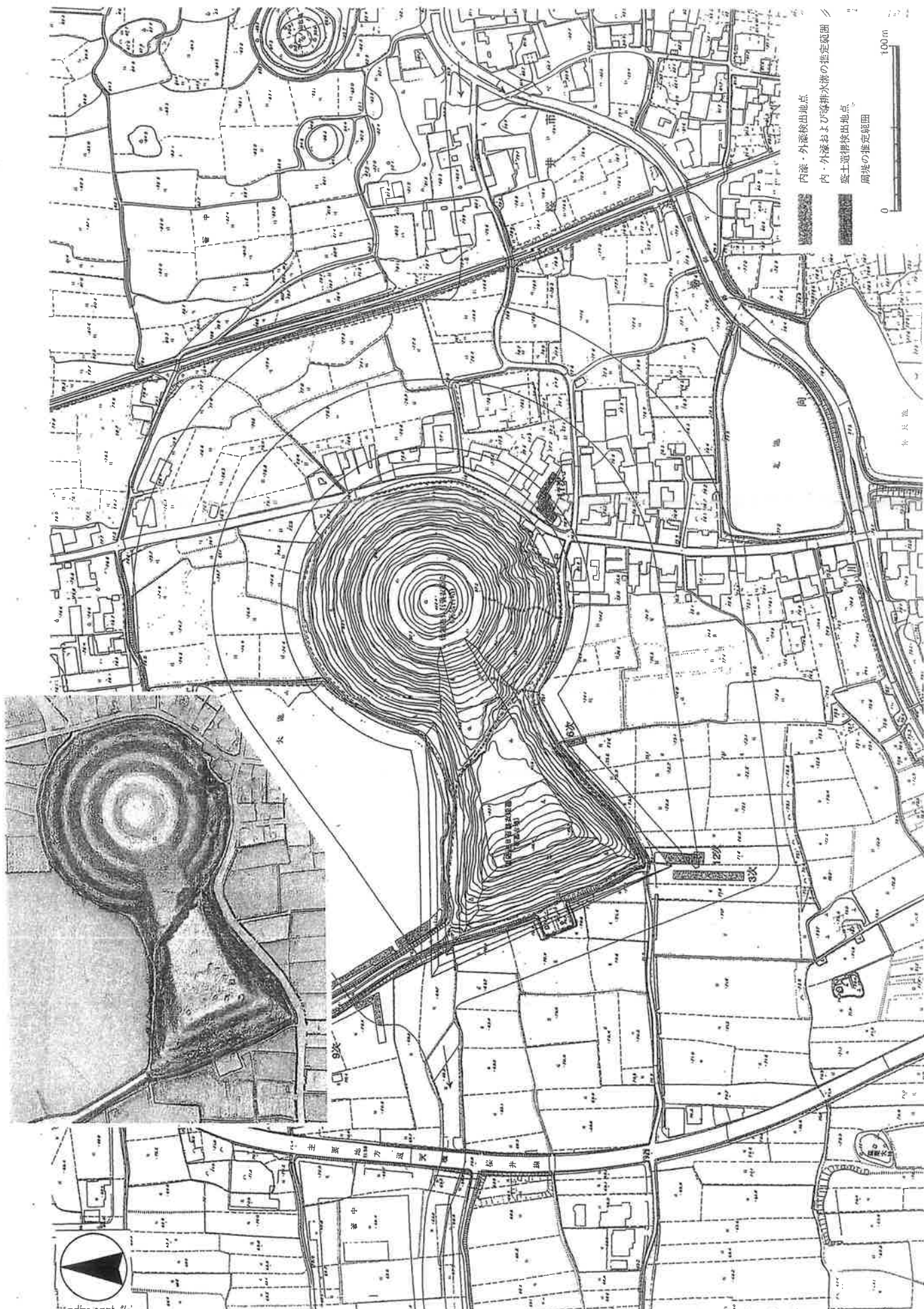
有力者の墓の形から見た3世紀半ごろの勢力関係



箸墓古墳周辺遺跡分布図

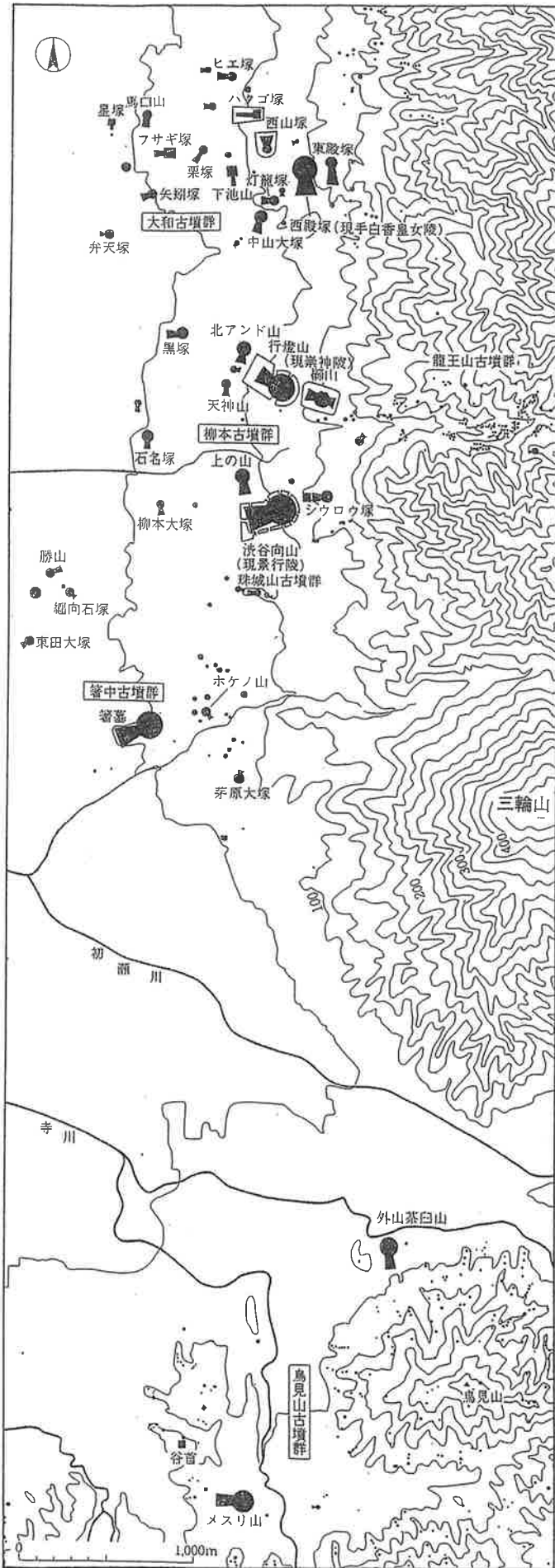
- 1. 箸墓古墳 2. 纏向遺跡 3. 勝山古墳 4. 矢塚古墳 5. 石塚古墳 6. 東田大塚古墳 7. 珠城山古墳群
- 8. ホケノ山古墳 9. 茅原大墓古墳 10. 箸中古墳 11. 車谷遺跡 12. 辺津磐座 13. 中津磐座 14. 奥津磐座
- 15. 芝遺跡 16. 狐塚古墳 17. 箕倉山遺跡 18. 馬場遺跡 19. 山ノ神遺跡 20. 三輪遺跡 21. 馬塚古墳
- 22. 弁天社古墳 23. 柳本大塚古墳 24. 上ノ山古墳 25. 渋谷向山古墳 26. 赤坂古墳 27. シウロウ塚古墳
- 28. 箸中西遺跡 29. 新屋敷遺跡 30. 東新堂遺跡 31. 上ノ庄遺跡 32. 粟殿遺跡

奈良県立橿原考古学研究所, 2002 『箸墓古墳周辺の調査』奈良文化財調査報告書 第89集



菅墓古墳に関する調査トレンチの状況と築造プランの想定 (2002年3月現在)

奈良県立橿原考古学研究所, 2002 『菅墓古墳周辺の調査』 『奈良県文化財調査報告書』 第89集



奈良盆地東南部における大型古墳の分布

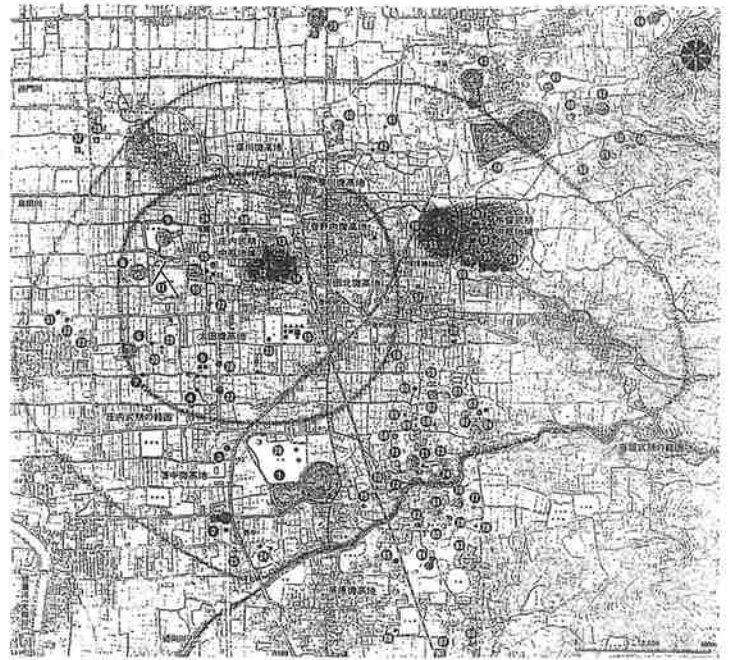


図1 纏向遺跡の範囲と大型建物発出地点
(桜井市立埋蔵文化財センター「ヤマト王権はいかにして始まったか」による)

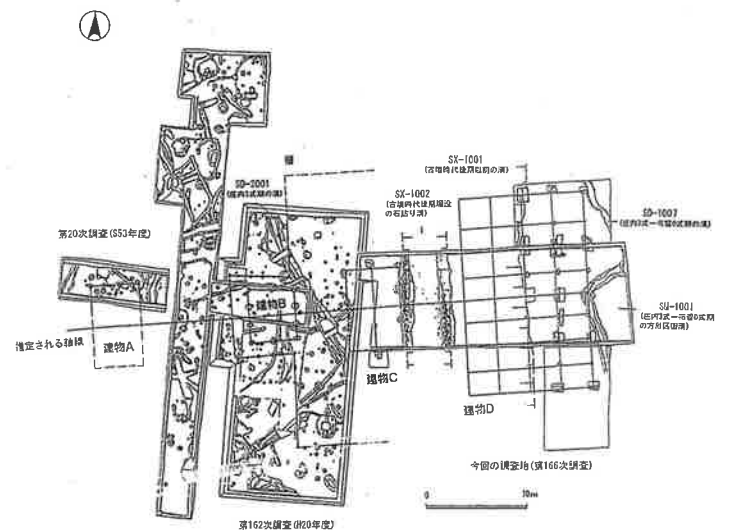
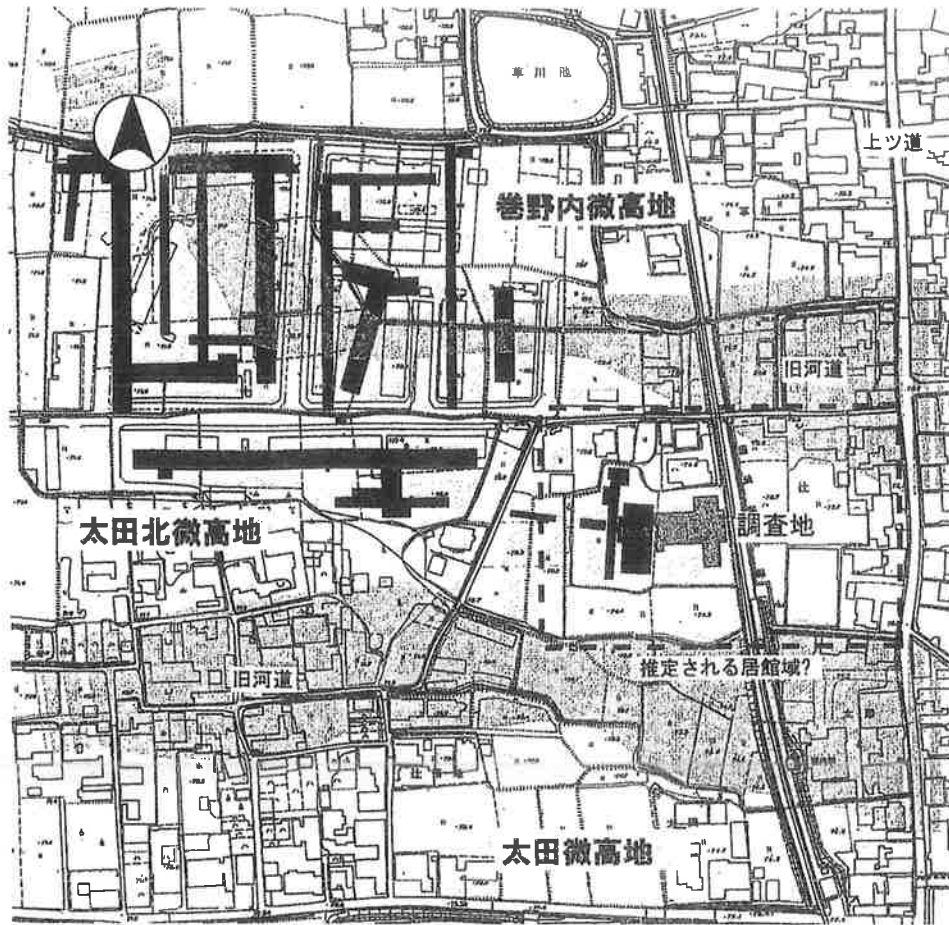
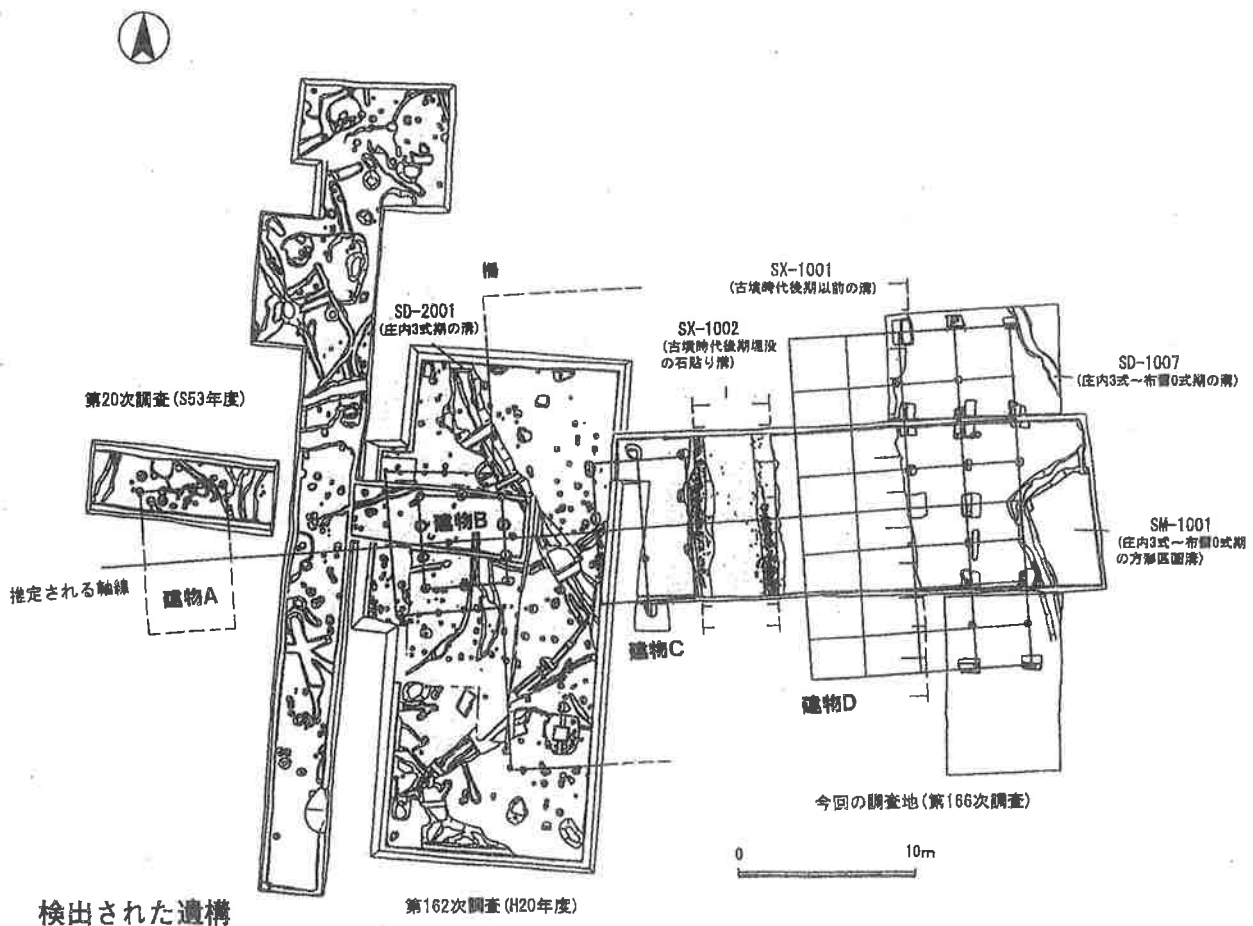


図2 纏向遺跡大型建物群遺構配置図 (桜井市教育委員会「纏向遺跡第166次調査現地説明会資料」による)



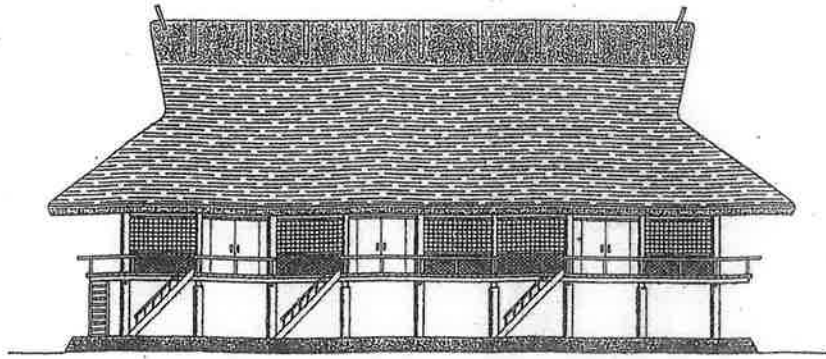
調査地周辺位置図



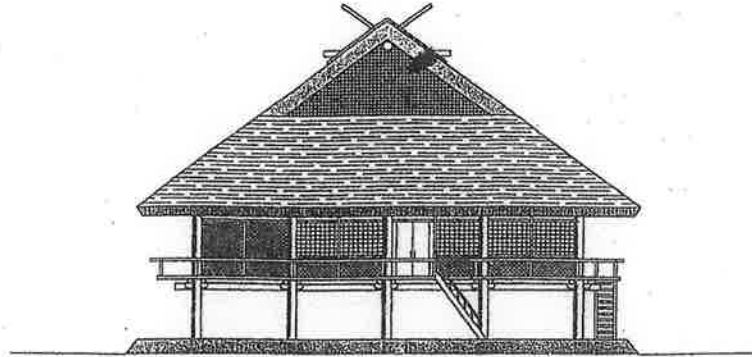
検出された遺構

第162次調査 (H20年度)

橋本輝彦, 2010 「経向遺跡における居館域の調査」 『大美和』 118号, 大神神社



建物D 東立面図

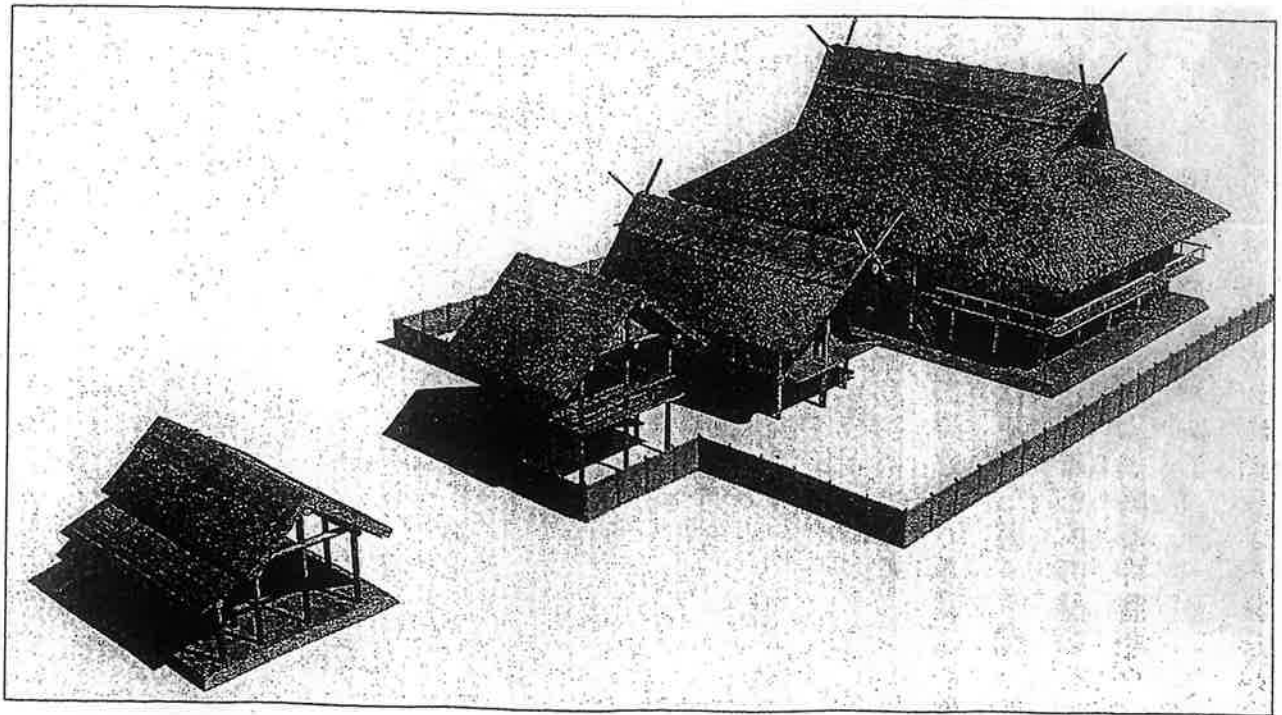


建物D 南立面図

縄向遺跡	D棟	
神戸大学建築史研究室	立面図	09/11/07 現在



「縄向遺跡」建物D、Cの復元（2009.11.10記者発表資料）
黒田龍二氏（神戸大学大学院工学研究課準教授）による



全体復元図

©NHK/タニスタ

黒田龍二, 2010 「初期ヤマト王権中枢施設と形と意の意味」『大美和』119号

纏向遺跡から4棟目

奈良

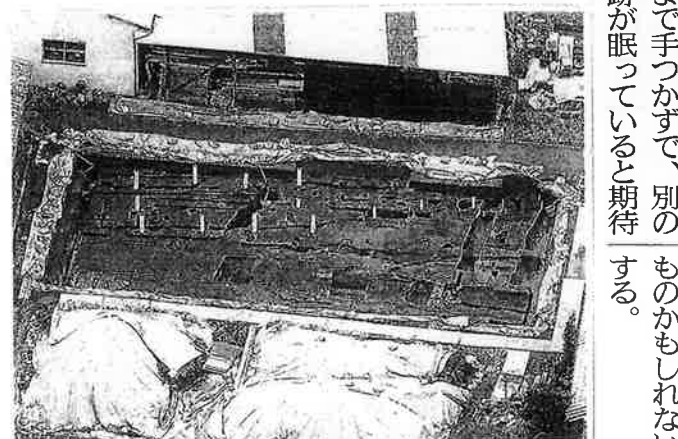
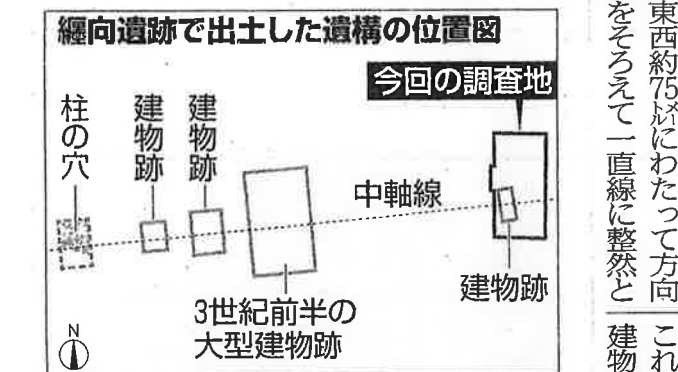
3世紀 建物群規模広がる

邪馬台国の有力候補地・纏向遺跡(奈良県桜井市)で、「卑弥呼の宮殿」ともいわれる3棟の大型建物群(3世紀前半ごろ)の東側から新たに建物跡が見つかり、同市教育委員会が6日、発表した。



纏向遺跡で新たに見つかった建物跡(柱で囲われた部分) 奈良県桜井市

3棟はJR桜井線の西側にあつたが、今回は初めて東側を発掘。調査した市纏向学術センターの森嶋郎研究員は「4棟は同じ時期に共存していた可能性が高く、大型建物群はより東に広がっていたのだろう」とみている。
2009年の調査で見つかり、3世紀前半としては国内最大の大型建物跡(推定床面積約238平方メートル)など計3棟は、東西向きをそろえて整然と一列に並んでいた。今回の



今回見つかった建物跡。ポールが柱穴。国内最大規模の大型建物跡はこの30センチ西側(写真上の方向)で確認された。6日午後、奈良県桜井市、本社へりから、森井英二郎撮影

2014. 2. 17 (朝日)

建物は大規模建物から約36メートル離れていたが、延長線上にあつた。
見つかった建物跡は南北6・7メートル、東西3・4メートルで、残っていた柱材から柱の直径は約15〜20センチとみられる。柱穴が3世紀後半ごろに掘られた穴によって削られていたことから年代を推定した。

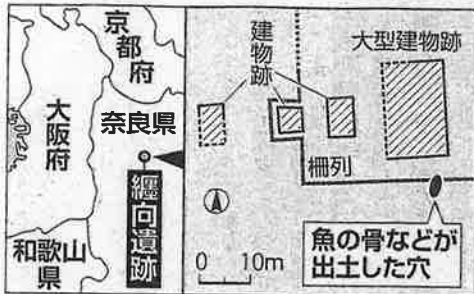
近くからは、3世紀後半ごろの柱穴の列や溝、4世紀前半ごろの大型建物跡とみられる柱穴なども見つかり、市教委は「首長級の館が連続して存在していた可能性がある」とみている。
纏向遺跡は3世紀初めごろ出現した南北約1・5キロ、東西約2キロの巨大集落跡。前方後円墳発祥の地とされ、卑弥呼の墓説がある

4棟東西に整然と並ぶ
「都市二端か」
奈良県桜井市の纏向遺跡で新たに見つかった「第4の建物」。過去に見つかった建物跡とあわせ、4棟が東西約75メートルにわたって方向をそろえて一直線に整然と並んでおり、初期ヤマト王権の「都市」の一端を示す遺構といえそうだ。
「卑弥呼の宮殿か」と話題になった大型建物跡3棟が見つかったのは2009年。今回の建物確認されたJR桜井線の東側区域はこれまで手つかずで、別の建物跡が眠っていると期待されていた。
日本考古学協会の森岡秀人理事は「藤原京や平城京など、その後の時代に中国の都を模して築かれた都城のよう。その原型のようなものでしょうか」と話す。ただ、都城は南北方向を基本として道路が走り、建物も連なるが、今回の方角は東西だ。
1971年から纏向遺跡の調査に関わる石野博信兵庫県立考古博物館長も「飛鳥時代の建物も南北に軸をそろえており、東西方向は太陽信仰にかかわるものかもしれない」と想像する。

卑弥呼の供物？ 山海の幸

纏向遺跡に祭祀跡

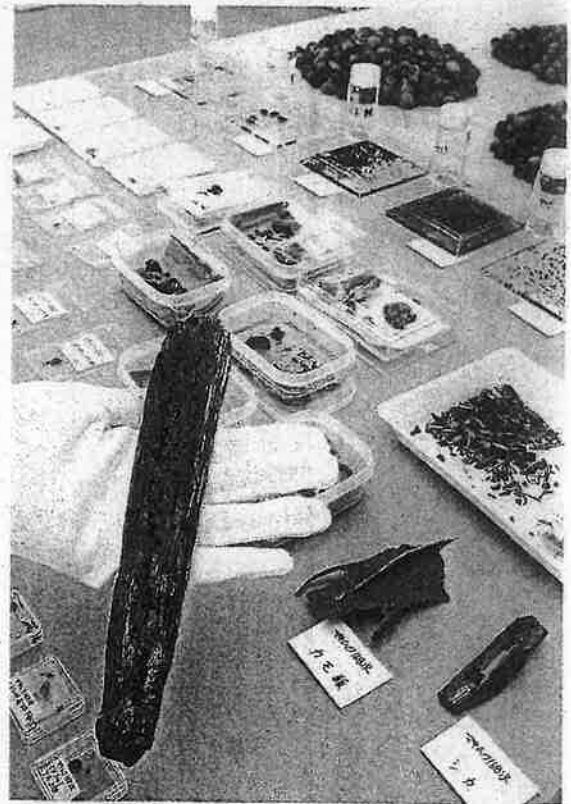
出土したのは、3世紀では国内最大とされる大型建物跡の南側の穴（南北4・3㍍、東西2・2㍍、深さ0・8㍍）で、2765個の桃の種も見つかっている。奈良女子大（奈良市）と奈良教育大（同）が穴の土壌を分析した結果、マダイやアジ、サバなど近海魚のほか、コイの仲間の川魚など6種類以上の魚の骨や歯、ウロコを確認。一部の骨には焼いた跡があり、人が食した可能性もある。



タイ・シカの骨など大量出土

が食した可能性もある。動物では、イノシシやシカに加え、カモの仲間の骨など千数百点があった。

植物は、稲、アワなどの種や実など73種類計9760点があった。中でも麻の種は535点、紙の原料で実が食べられるヒメコウゾの種は480点がまとまって出土した。土壌には海藻に付着する植物性プランクトンも含まれ、ワカメなどがあつたとみられる。また桃の花粉も残り、近くに桃園があった



纏向遺跡で出土した動物の骨や植物の種

海の魚	マダイ、ヘダイ、アジ、サバ、イワシ	
川魚	コイの仲間(?)	
その他の動物	シカ、イノシシ、カエル、ネズミ、カモ	
栽培植物	イネ、アワ、ヒエ、麻、ササゲ(小豆か緑豆)、エゴマ、ヒョウタン、ウリ、桃、スモモなど	
野生植物	ヒメコウゾ、ヤマモモ、ヤマグワ、サンショウ、マタタビ、サルナシ、ブドウ、グミ、トチなど	

出土した魚の骨や穀類など。手に持っているのはシカの骨（21日、奈良県桜井市で）＝前田尚紀撮影

※桜井市教委の資料に基づく

ことをうかがわせる。卑弥呼が登場する魏志倭人伝では、3世紀頃の日本では稲や麻が栽培され、水中に潜って魚を捕らえたと書かれているが、祭祀の供物や食生活の詳細については記されていない。出土した骨などは、桜井市芝の市立埋蔵文化財センターで22日～27日（月・火曜休館）に展示する。辰巳和弘・同志社大教授（古代学）の話「のちの天皇が支配地域で得られる様々な食物を供献させ、支配の正当性を証明した『食国儀礼』の原型があつたのだろう。纏向遺跡の有力者の支配が大坂湾など海辺に及んでいたことがわかり、同時代にいた卑弥呼の食卓も想像できる発見だ」

東の「邪馬台国」の論拠となる遺物、遺跡

箸墓古墳はじめ、前期初頭の古墳が纏向に集中しています。

列島各地からもたらされた土器が出土し、各地から人びとが集まったことがわかります。



▲箸墓古墳 遺跡の南端には箸墓古墳があり、秀麗な姿を見せています。全長約 280 メートルの前方後円墳で、遺跡内最大です。卑弥呼または壹(臺)与の墓とする説もあります。



纏向遺跡の土器と各地から持ち込まれた土器

古墳時代前期 3世紀

- 1: 手焙り形土器 高さ 12.7 センチ、最大径 12.0 センチ
- 2: 小型丸底壺 3: 小型器台 4: 吉備系壺 5: 高杯
- 6: 北陸系壺 7: 山陰系壺 8: 直口壺 9: 東海系壺
- 10: 東海系壺 11: 直口壺 12~14: 支脚 15: 山陰系壺
- 16: 吉備系壺 17: 直口壺 18: 東海系壺

纏向遺跡には在地の土器のほかに、各地の土器が多く出土しています。その範囲は広く北部九州から南関東にわたります。中でも東海地域の土器が多く見つっています。これら各地域の土器は持ち込まれたものだけでなく、纏向遺跡で製作されたものも出土しています。古墳時代前期にこれほど多くの地域の土器が出土する遺跡はほかには見つかっておらず、当時の纏向遺跡は全国各地の人たちの集まる集落であったのでしょう。

(北井利幸)

群馬県の古墳時代

群馬県では、昭和10年に県下全域を対象とする古墳の悉皆調査が一斉になされ、その調査成果は『上毛古墳綜覧—群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第5輯—』として刊行された。それによれば、当時、群馬県には8,423基の古墳が存在していたことが知られている。さらに、その後、火山灰層に覆われた古墳等、これまでに全く気づかれなかった古墳が新たに発見されてきており、今では群馬県内にはかつて1万基に近い古墳が存在したものと考えられている。

このように、群馬県は日本の中でも有数の古墳分布県であり、しかもその内容も極めて優れたものであることからよく古代東国文化の中心地域と言われている。

ところで、3世紀末頃に畿内から瀬戸内・北部九州にかけて出現した古墳は、大和政権の支配が地方に及んでいく中で、4世紀末頃には西は九州から東は東北までに波及したと推測されている。

このような状況の中で、群馬県でも初めて古墳が造られたのは、4世紀中頃から後半とされている。この時期の古墳の分布を見ると高崎市、藤岡市、富岡市を中心とする西毛地域と前橋市から太田市にかけての県内の平野部に散在していることが看取できる。これはそれぞれの地域で小地域圏が形成されて、その中で首長層の成長があったことを示すものと思われるが、その出現の在り方をみると地域によって違いが認められる。富岡市北山茶臼山古墳、高崎市柴崎蟹沢古墳、榛名町本郷大塚古墳、玉村町軍配山古墳など円墳で出現するグループ、高崎市元島名將軍塚古墳、前橋市天神山古墳、同八幡山古墳、伊勢崎市華蔵寺裏古墳、太田市朝子塚古墳、同八幡山古墳、同矢場薬師塚古墳など前方後円墳や前方後方墳として出現するグループとに大別される。この古墳の出現の在り方の違いは、それぞれの小地域の有する歴史的背景の差と解されている。前者は弥生時代の伝統的地域であるのに対し、後者は古墳時代になって開発された新開発地域であったと考えられており、群馬県における古墳の出現は後者が主導的役割を果たしたものと推測されている。

これら出現期の古墳のうち、その内容が比較的良好に判明しているのが前橋天神山古墳である。天神山古墳は全長126mを計り、後円部に長さ約9mにも及ぶ長大な粘土槨を有し、その中から銅鏡、碧玉製紡錘車をはじめ武器・武具類、農具類など豊富な副葬品が検出された。この天神山古墳の規模や副葬品は他の古墳に比べ突出した感はあるが、総じて群馬県の出現期古墳の特徴を示している。すなわち、墳丘には未だ埴輪列の樹立をみず、内部施設は粘土槨を主体とする竪穴系石室を採用し、副葬品として銅鏡、鉄製武器・武具類、農具類を納めている例が多い。銅鏡の中で特に注目されるのが天神山古墳、北山茶臼山古墳、柴崎蟹沢古墳から発見されている三角縁神獸鏡と呼ばれる日本固有の鏡である。この鏡は日本の古墳時代、とりわけ初期の大和政権の支配過程を知る上で貴重な資料であるが、現在までに群馬県からは11面発見されており、東国にあっては圧倒的な数を誇っている。

まえばしてんじんやま こふん

前橋天神山古墳(県)

指定年月日：昭和45年12月22日

所在地：前橋市広瀬町1丁目27-7番地

指定面積：730㎡

整備状況：案内板設置。埋葬施設部のみ保存。

出土品保管先：文化庁(東京国立博物館)

前橋市教育委員会文化財保護課

交通：東武バス広瀬山王行天神山停留所より徒歩5分



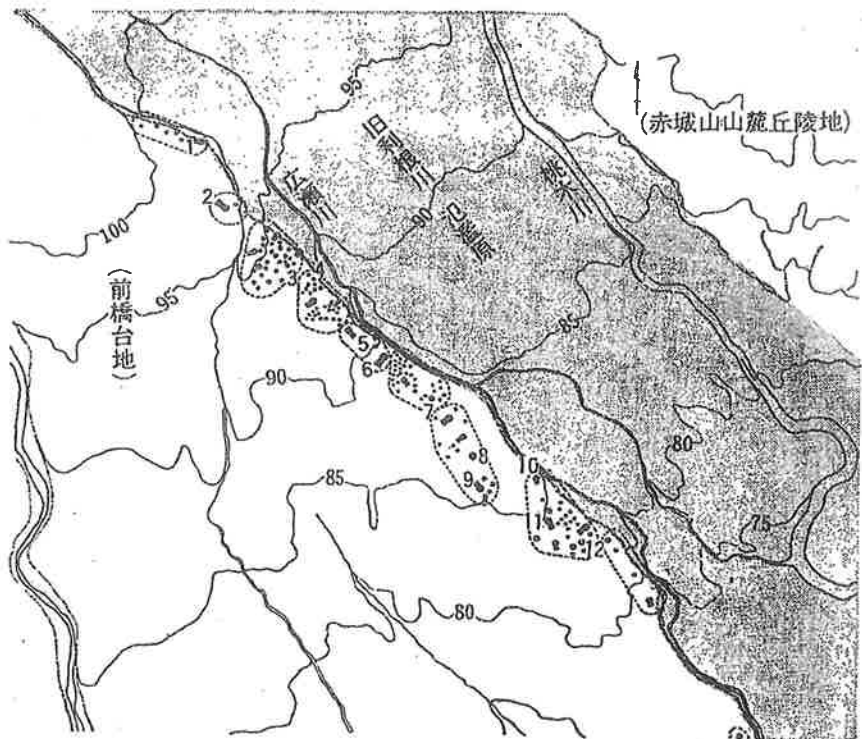
前橋天神山古墳は、前橋市街地より東南4km、前橋台地の北東縁にあたる標高90m前後の平坦地であって、旧利根川に浸蝕されて形成された3~5mの高さを有する崖の上に存在する。

今の前橋市文京町から同東善町にかけて旧利根川の5kmにわたる崖の縁辺に149基もの古墳が存在した。しかし、この地域では昭和30年代から住宅地化が進み、ほとんどの古墳が消滅してしまい、西北の端の不二山古墳から東南にむかい天川二子山古墳、八幡山古墳、飯玉神社古墳、亀塚山古墳、金冠塚古墳、文殊山古墳とその周辺の円墳群となり東南端に経塚古墳を残す程度となっている。この天神山古墳も例外ではなく、その雄姿はなく四角な埋葬施設部を残すだけとなっている。

かつての天神山古墳は、前方部を西南に向けた前方後円墳で、全長129m・前方部幅68m・後円部径75mである。高さは後円部で9m、前方部は7mと前方部に比べ後円部が高いことが特徴である。墳丘は3段で造成

され葺石は葺かれるが、埴輪は存在しない。しかし、後円部頂部には赤色塗彩された底部に穴が穿けられた土師器壺形土器が発見された。周堀は盾に似た形の平面形で墳丘を巡っていたと推定される。

昭和48(1968)年に発掘調査がおこなわれ、主体となる埋葬施設は、後円部に石敷面下の墓壇の底部をさらに掘り込んで造られた粘土槨で、長さ7.8m、幅1.2m前後の巨大な割竹形木棺を被



前橋東南部地域の古墳分布

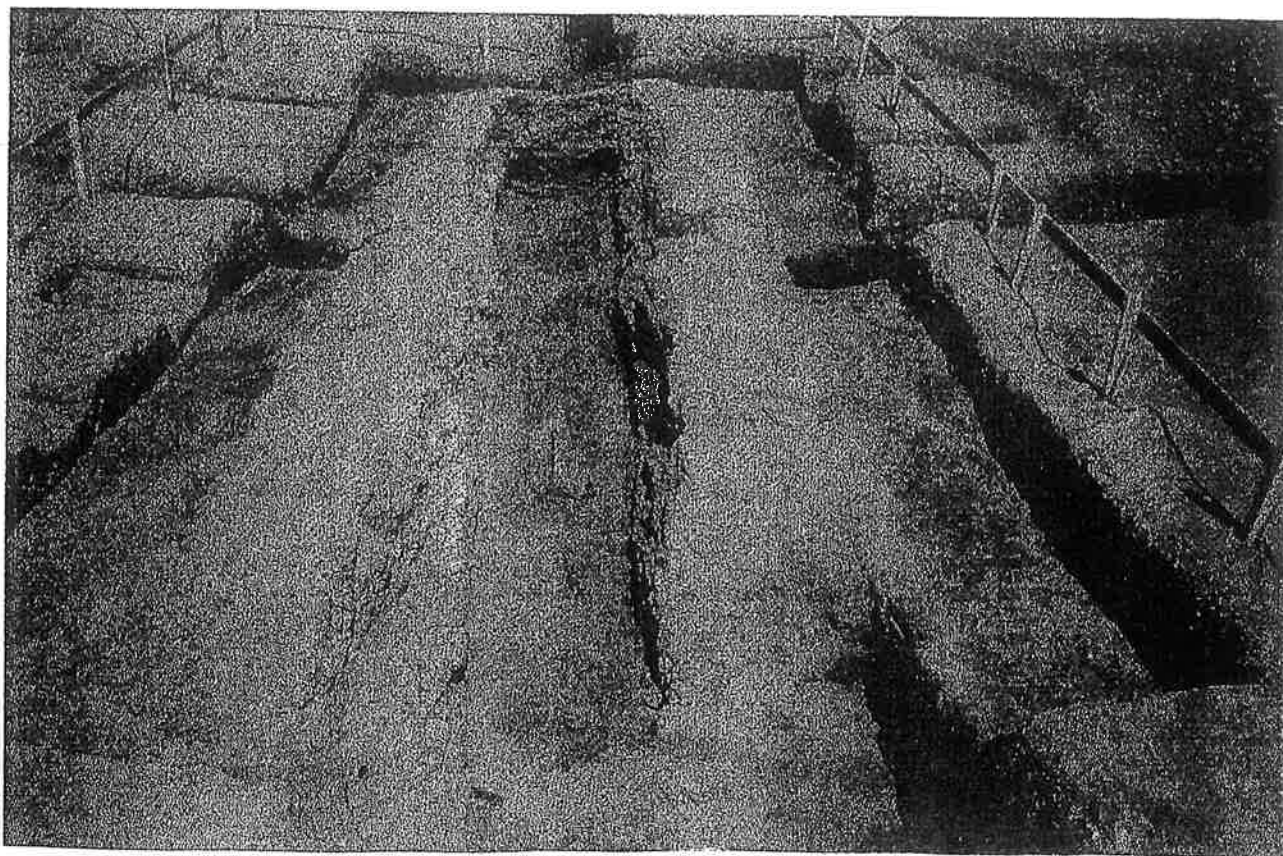
(1不二山古墳、2二子山古墳、3朝倉2号墳、4朝倉1号墳、5八幡山古墳、6天神山古墳、7飯玉神社古墳、8鶴巻古墳、9二子山古墳、10亀塚古墳、11山王塚古墳、12文殊山古墳〔昭和35年実施の群馬県古墳調査による「古墳台帳」により作成〕)

覆したものと判明した。その櫛内から銅鏡5（禽獸鏡・神仙鏡・三角縁四神四獸鏡・三角縁五神四獸鏡・獸形鏡）大刀5・劍15・銅鏃74・ヤリガンナ16・ノミ1・斧1・鈎状金具5～6・刀子1・靱^も2・紡錘車形碧玉製品4・土師器埴1がある。三角縁五神四獸鏡は奈良県桜井市茶白山古墳出土の鏡と同範鏡である。紡錘車形碧玉製品は、奈良県メスリ山古墳例にみる玉杖のような杖形儀器の部品の見方もできるが、単独でも宝器として使用された可能性が高い。

以上のように前橋天神山古墳は4世紀後半に築造された関東地方を代表する最古の前方後円墳である。また、墳丘規模や副葬品の内容においても畿内政権と深いつながりを有する。

また、竪穴式石室の場合、時期を違えて複数の埋葬施設を有することは、本古墳をはじめとして、藤岡市白石稲荷山古墳や埼玉稲荷山古墳でも中央埋葬施設の存在が推定されており、普遍的な在り方と考えられる。

（本山 卓）



群馬県教育委員会、1995『群馬県の史跡』古墳編

ちょうしづかこふん

朝子塚古墳(県)

指定年月日：昭和54年10月2日

所在地：太田市牛沢町1110-2ほか

指定面積：9,610㎡

整備状況：標柱・説明板設置、道標設置

出土品保管先：群馬大学、太田市教育委員会

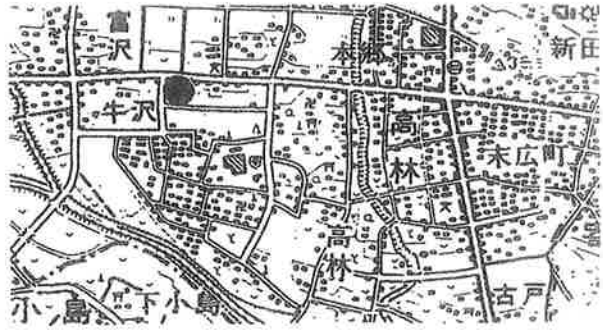
交通：東武伊勢崎線太田駅から車で15分
(又は、東武バス太田―熊谷線高林
十字路から徒歩20分)

太田市南部の低台地南西端に築造された前方後円墳で墳丘の全長123.5m、後円部直径62m、高さ11.8m、前方部前端幅48m、高さ6.8mである。後円部に比較し前方部がきわめて低く細長い形を示す古式の墳形である。墳丘には川原石による葺石が全面に葺かれ、周堀は墳丘に沿って一周していると考えられている。

埴輪は墳丘裾部と中段部にめぐるほか、後円部墳頂には方形に大形円筒埴輪列が配され、その列中からは祖形の埴輪と見られる底に孔をあけた壺形埴輪が出土している。

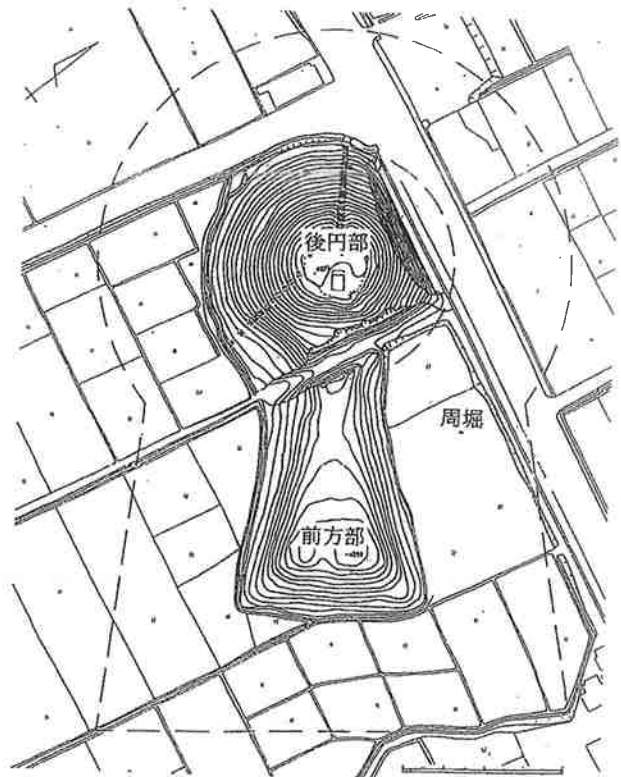
主体部は竪穴系のものと推定されるが構造等は未調査のため不明である。

西方約1.5kmにある石田川遺跡との関連も考えられ、現存する古式古墳の



典型である。

築造時期は4世紀末から5世紀初頭頃と推定されている。(吉田 誠)



大和政権 新潟まで影響力

新潟県胎内市教育委員会は

6日、同市大塚にある4世紀前半の「城の山古墳」から、銅鏡や勾玉、大刀など、近畿地方の大和政権の古墳から出土した副葬品と同じような組み合わせの副葬品が見つかったと発表した。日本海側では従来、能登半島がこの時代に大和政権の影響が及んだ「北限」と見られていたが、新潟県北部まで影響が及んでいたことを示す発見という。



胎内・城の山古墳 畿内と類似の副葬品



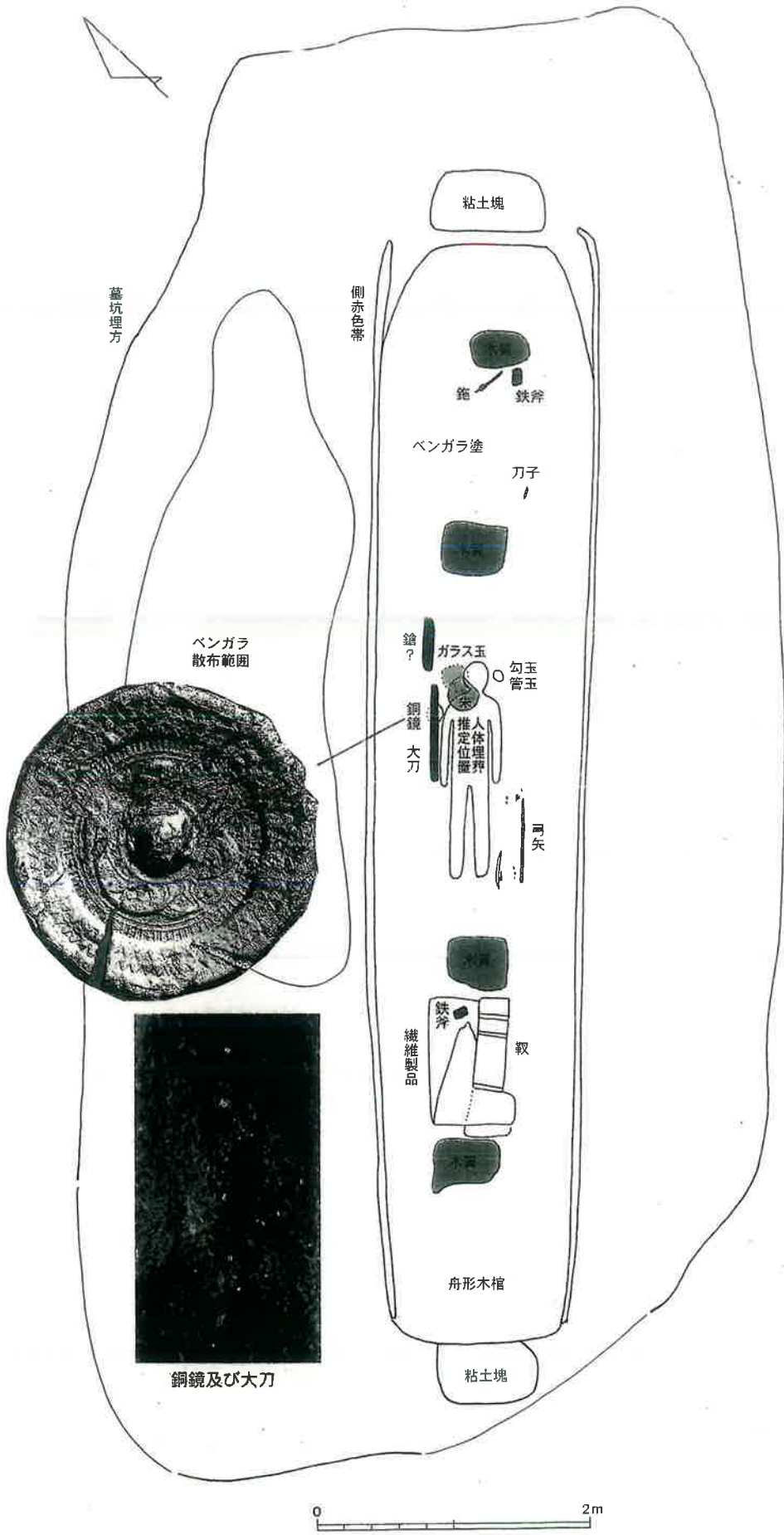
城の山古墳は、長径41センチ、短径35センチの円墳で、高さは約5センチ。市教委は、古墳時代前期の古墳としては日本海側最北だとして1997年に調査を始めた。今春からは古墳上部にある長さ約10・5センチ、幅約5センチの墓坑の内部を調べていた。出土した副葬品は、直径約9センチの銅鏡のほか、長さ67センチの大刀やおの、ヒスイの勾玉1点、緑色の凝灰岩でできた

管玉8点など。弓2張の遺物や、矢を入れる革製の箱「鞆」に塗られていた漆も確認された。市教委は副葬品について「畿内の前期古墳と同じようなセットで、被葬者は畿内の有力者と太いパイプがあったことが明らかになった」と説明している。市教委によると、日本海側では石川県・能登半島の「国

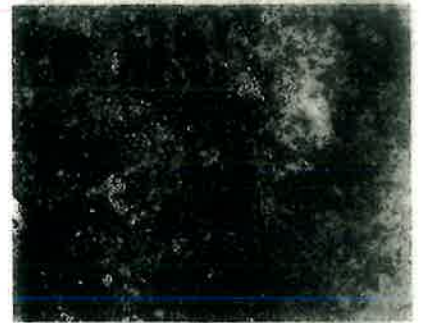
「北限」能登から250キロ

分尼塚古墳(七尾市)や「雨の山古墳群」(中能登町)で同様の副葬品が確認されていた。城の山古墳は両古墳から約250キロ離れており、今回の発見は大和政権が4世紀からこの地域に影響力を広げていたことを示すという。菊地芳朗・福島大教授(考古学)は「前期古墳は、近畿から離れるにつれて副葬品が乏しくなる傾向にあると見られていたが、城の山古墳は副葬品の内容が充実し、古墳時代に関する考え方を変える発見だ」と話している。(戸松康雄)

①城の山古墳で見つかった勾玉と管玉②ガラス玉③大刀。大刀に重なっている丸形の出土品が銅鏡＝いずれも新潟県胎内市大塚、同市教委提供



鉈と鉄斧



ガラス玉と朱



勾玉と管玉



弓 矢



鞆 等

城の山古墳埋葬部模式図

新潟県胎内市教育委員会, 2012 『城の山古墳第6次調査現地説明会資料』